

近代中国研究センター

彙報

11

東京大学文学部図書印
東洋文庫
近代中国研究委員会

1968

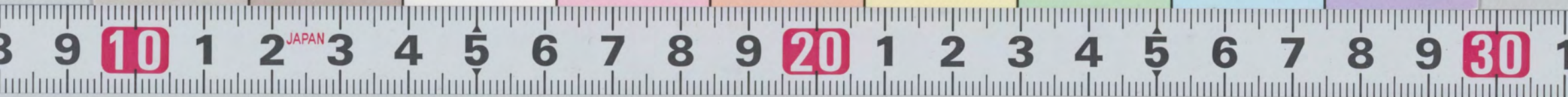
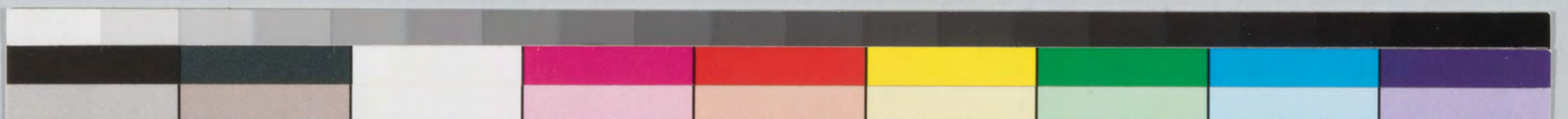


文庫



も く じ

市古宙三：近代中国研究の手びき（2）	1
中国の文化大革命に関する日本雑誌論説目録（3）	12
中国ソヴェト関係資料	20
新刊紹介	28
センター出版物目録	32



近代中国研究の手びき(2)

—中国文の研究論文を探す方法—

市 古 宙 三

ある。

I は し が き

- 1) ここに近代中国というのは、19世紀の中頃から今日までの中国を指す。
- 2) 中国文の研究書、研究論文にどんなものがあるかを探すのに最も手っ取り早い方法は、そのテーマ、あるいはテーマに密接に関連する項目を、『アジア歴史事典』に当たってみることである。もしこの事典にあれば、その参考文献の中に、中国文の研究成果を見出すことができるであろう。
- 3) しかし自分の選んだ研究テーマが、うまく『アジア歴史事典』に出ているとは限らないし、出ていても参考文献のあげてないばあいがある。あげてあっても一、二にすぎずもっとたくさんみたいということがある。そういうばあいには、文献目録、解題とか、入門書、動向の類をみればいい。
- 4) この『手びき』の主目的は、近代中国研究者に役立つような文献目録、解題や入門書、動向の類を紹介することである。しかし結果的には、近代中国研究専用の目録、解題の類は極めてすくないので、一般に中国研究に役立つ目録、解題を列挙することになってしまった。
- 5) 文献目録、解題には網羅的なものと精選されたものとある。初心のものには後者がいいが、研究をすすめていくにつれて前者が必要となる。入門書、動向の類は、精選された文献目録、解題に相当するといえよう。
- 6) 以下、東洋文庫で見られるものを主とし国立国会図書館、ハーヴァード大学にあるものを参照して、文献目録、解題、入門書、動向を列挙する。各項をみるに当たって次のことを注意してほしい。
イ) 単行本はゴシック、雑誌論文は「」であらわす。
ロ) 書名の次に(1945~1966)という風にかけてあるのは、「この書によって1945年から1966年までに発表された研究書、研究論文が検索できる」ということを意味する。
- 7) 西洋人の研究論文を探す方法は別に述べるつもりで

II 雑誌論文を探す方法

中国人の中国史に関する研究論文を探すのに、一番便利なのは

【124】中国史学論文索引(1900~1937)。中国科学院歴史研究所第一、二所、北京大学歴史系合編、北京、1957、2 v.

である。もと中国人の雑誌論文を探すのによく用いられたものに

【125】国学論文索引。北平北海図書館編目科編、北平、1929、232 P.

【126】国学論文索引・続編。国立北平図書館編纂部索引組編、北平、1931、198 P.

【127】国学論文索引・三編。劉修業編、北平、1934、402 P.

【128】国学論文索引・四編。劉修業編、北平、1936、486 P.

がある。但し、これでは1935年末までに発行された論文しか調べられない。それで新中国では、これを増補して

【129】国学論文索引・五編。北京図書館参攷研究組編、北京、1955、2 v.

をつくり、台湾でも『国学論文索引』につぐものとして

【130】民国学術論文索引。章羣編、台北、1954、238 P.

を刊行した。

最初に掲げた【124】『中国史学論文索引』は、『国学論文索引』の初編【125】から五編【129】までをあわせたようなもので、1900年から1937年に至る約40年間に中国で刊行された雑誌1300余種の論文を、歴史、人物伝記、考古学、目録学、學術思想史、社会学史、政治学史、経済学史、文化教育事業史などの17類に分類排列している。

以上はいずれも歴史学を主として學術論文を集めたものであるが、もっと一般的な雑誌論文記事まで含めたものとしては、

【131】中文雑誌索引(第一集)。嶺南大学図書館編、広州、1935、2 v.

【132】 支那文雑誌内容索引目録。中支建設資料整備事務所編，上海，1940，340 P. がある。

今まで述べてきたものには、しかし、最近の論文——1949年以後の雑誌論文——はほとんど含まれていない。最近の論文を調べるには、人民中国のばあいならば

【133】 全国主要報刊資料索引（1955～1960）。上海市報刊図書館発行。

【134】 国内報刊有関地理資料索引（1953～1956）。中国科学院地理研究所編，北京，中国科学院発行。

を見るがいい。報刊とは新聞雑誌という意味。前者ははじめ、雑誌論文だけの索引であったが、1956年2月以降は、新聞の論文を含めるようになった。1956年6月までは隔月刊、以後は月刊。また1959年以降は、哲学社会科学部門と自然技術科学部門とに分れている。今日も出ているかどうか知らないが、1960年まででていたことは確かである。

台湾で発行された雑誌の論文を調べるには、

【135】 中文期刊論文分類索引（5輯）（1947～1964）。国立台湾大学図書館編，台北，1960～1966. 5 v.

【136】 期刊論文索引（1960～1967）。国防研究院図書館編，台北，1960～1967.

がいい。前者の第一輯は1960年，第二輯は1962年，第三輯は1963年，第四輯は1964年，第五輯は1966年に刊行されていて、これら5輯で、1947年以降1964年以前の雑誌論文をみつけることができる。後者は月刊。台湾発行の新聞の論文は、

【137】 中文報紙論文分類索引（1962～1964）。国立政治大学社会科学資料中心編，台北，1963～1965，3 v.

で探せる。

以上、一般的、総括的な論文目録をあげてきたが、次に、部門別の論文目録を掲げる。まず歴史関係。歴史学というのは、一般的、総合的なものであるが故に、これまでも述べてきたが、時代別の論文目録としては、

【138】 中国近代史論文索引稿（1949～1956）。中国科学院歴史研究所第三所編，中国近代史研究会複製，京都，1957，65 P.

【139】 中国古代及中世紀史報刊論文資料索引（1949～1959）。華東師範大学歴史系・中国古代及中世紀史教研組編，大安影印，東京，1967，65 P.

がある。前者は、1949年から1956年の間に、人民中国で刊行された新聞雑誌に掲載された1840年から1949年にいたる中国歴史に関する論文の目録である。『近代中国研究の手びき』に挙げるのに適わしいほとんど唯一の論文目録とっていいであろう。後者は1949年から10年の間に人民中国で発表されたアヘン戦前の中国史に関する研究論文目録である。

その他、部門別のものを列挙すれば、次の通りである。

【140】 図書館学論文索引・第一輯（清末至1949年9月），李鍾履編，北京，1959，367 P.

【141】 図書館学論文索引・第二輯（1949年10月至1957年2月），南京図書館編，北京，1959，140 P.

【142】 文学論文索引。陳璧如・張陳卿・李維埈編，北平，1932，314 P.

【143】 文学論文索引・続編。劉修業編，北平，1933，352 P.

【144】 文学論文索引・三編。劉修業編，北平，1936，486 P.

【145】 中国地学論文索引・正統編。王庸・茅乃文編，北平，1933～1936，4 v.

【146】 中国地業期刊論文索引（1917～1959）。北京地業学院図書館編，北京，1960，366 P.

【147】 教育論文索引。北京清華学校教育社編，北京，1924，390 P.

【148】 教育論文索引・増訂。邵爽山・彭仁山編，上海，1932，698 P.

【149】 近十年来教育論文索引（1946～1956）。司琦編，台北，1957.

【150】 近五年教育論文索引（1957～1961）。台湾省立師範大学図書館編，台北，1963，86 P.

【151】 教育論文索引・第二輯（1962）。台湾省立師範大学図書館編，台北，1963.

【152】 教育論文索引・第三輯（1963）。台湾省立師範大学図書館編，台北，1964，191 P.

【153】 E-tu Zen Sun, John de Francis. *Bibliography on Chinese social history; a selected and critical list of Chinese periodical sources.* New Haven, 1952, 150 P.

著者別の論文目録には

【154】 中国史学論文引得（1902～1962）。余秉権編，香港，1963，572 P.

【155】 Columbia University, East Asian Library. *Index to learned Chinese periodicals.* Boston, 1962, 215 P.

がある。前者は1902年から1962年の間に発行された中文

先年
捷雄
を集
中国を英
——マ
で（坂
孫文と中
して（
中国ナン
——陳
日華緊張
と日日
インド民
中国共产
中国問題

近代中国政

著者
から
少の
外に
を附
清朝体制
1958年
アロウ戦
アヘン戦
（『東
〔付録〕
史講座
砲艦政策
（『国
ミッチェ
（『東
ヨーロッパ
（『東
〔附録〕
（『近
（『近



の雑誌 355 種の史学論文名を著者別に排列したもので、編者が利用した雑誌の所在も記されている。香港大学馮平山図書館のものが主として使われている。後者は史学年報・燕京学報・金陵学報・清華学報・中国文化研究彙刊・中央研究院歴史語研究所集刊など1920年～1950年代の主要学術雑誌の論文名を、著者別と項目別とに排列したものである。

雑誌別の総目録は、雑誌に附載されていたり、雑誌社が単独刊行したりしているものが多いが、それらはここでは略する。雑誌社とは無関係に編修刊行されたものもまた少くない。単行本になっているものとしては、

- 【156】 東方雑誌総目。三聯書店編輯部編，北京，1957，580 P.
 【157】 新中華総目。三聯書店編輯部編，北京，1957，165 P.
 【158】 国聞週報総目。三聯書店編輯部編，北京，1957，394 P.
 【159】 新青年総目録。大安編集部編，東京，1962 88 P.
 【160】 新民叢報目録。中国革命史研究会編，京都，1958，138 P.
 【161】 国粹学報目録。中国革命史研究会編，京都，1958，95 P.

などがあげられる。このほか総目録が雑誌、集刊などに載せられているものに、国史館館刊・中国農民・新青年（以上『近代中国研究』第二輯所収）、清議報・近代史資料・中国農民（以上『近代中国研究』第三輯所収）、時務報（『近代中国研究』第五輯所収）、商務官報（『近代中国研究』第六輯所収）、政法研究・法学（以上【39】『日本におけるアジア・アフリカ研究の現状と課題：文献目録・解題——中国・法律』所収）、経済研究（『大安』13巻1～8号所収）がある。

また幾つかの雑誌の総目録を1冊にまとめたものもある。

- 【162】 五四時期刊紹介（3集）。中国共産党中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局研究室編，北京，1958～1959，3 v.
 【163】 中国雑誌論説目録：万国公報・江蘇・浙江潮・湖北学生界・民報。東洋文庫近代中国研究委員会編，東京，1955，127 P.
 【164】 「延安時期における中共出版雑誌目録」（『アジア研究』13-3，59～81 P. 所収）。徳田教之編。
 【162】 は、五四前後の頃に発行された『新青年』・『每週評論』・『湘江評論』・『共産党』・『先駆』・『新海豊』・『珠

江評論』など153種について解説し、その発刊詞、宣言を覆刻し、総目録を掲げている。【164】は台湾の司法行政部図書館が所蔵している延安時代の中共雑誌、『共産党人』・『党的生活』・『党内通訊』・『斗争』など22種の内容目録。

III 図書を探す方法

次に単行本にうつろう。近代中国の研究者にとって一番いいガイド・ブックは

- 【165】 John King Fairbank, Kwang-ching Liu. *Modern China ; a bibliographical guide to Chinese works, 1898~1937.* Cambridge, 1950, 608 P.

であろう。近代中国研究に必要な参考書、研究書、資料が、ハーヴァード大学の蔵書の中から主として選ばれ、解説がつけられている。ただ1950年の出版であるから、当然のことながら、最近の研究は含まれていない。これを補うものは、後に述べられるであろう。

- 【166】 Ssu-yü Teng. *An annotated bibliography of selected Chinese reference works.* Cambridge, 1950, 326 P.
 【167】 中文参考書指南。何多源編，広州，1936，778 P.
 【168】 中文参考書挙要。鄧衍林，北平，1936，143 P.
 【169】 支那学入門書略解（新訂本）。長沢規矩也編，東京，1940，155 P.

はいずれも近代史を専門にしているわけではなく、一般的に中国研究に必要な参考書類をあげて簡単な解説をつけたものである。しかし近代史とて、中国史全体から切り離されているわけでないから、これらの書も、近代中国研究者に役立つといえよう。

どんな参考書、研究書があるか、ということ調べるには、普通の出版目録を見るのも一つの方法であろう。民国24年（1935年）までの民国時代に出版されたものを調べるには、

- 【170】 生活全国総書目（1935）。平心編，上海，1936，1 v.
 【171】 全国出版物総目録（1935年本）。開明書店編，223 P.

がある。何れも1935年現在において購入できる民国出版書の目録であるから、民国の出版物が網羅されているわけでないが、どんなものが出ていたかということ、これで一応はつかむことができる。このほか有名な書店は

大抵その書店の出版目録をだしている。たとえば、商務印書館の『圖書彙報』、開明書店の『簡明書目』、中華書局『圖書目録』などがそれぞれであるが、これらも参考になる。

人民中国になってからの出版目録には、

【172】 全国総書目 (1949~1958)。文化部出版事業管理局版本図書館編、北京、中華書局発行、

【173】 全国新書目 (1950~1966)。文化部出版事業管理局版本図書館編、北京、中華書局発行。

【174】 Guozi Shudian. *Publication news from China*. Peking, Guozi Shudian.

がある。【173】は1951年から出ている。はじめは年刊、ついで季刊、旬刊とかわり、最も新しいものは半月刊である。今日も出ているのかどうか知らないが、私の知っている一番最近のものは、1966年第14期(7月15日発行)である。【172】はこれをもとにして作られ年刊の出版目録。但し1949~1954年分は1冊にまとめて、1956年に出版された。私の知る最新のものは、1959年に出版された1958年度のもの。【174】は国際書店で出している出版ニュース。解説がついている。

台湾の出版物を知るには、

【175】 中華民国出版圖書目録 (1949~1960)。国立中央図書館編、台北、1956~1961、5v.

【176】 中華民国出版圖書選目 (1949~1956)。国立中央図書館編、台北、1957、59P.

【177】 National Central Library. *A selected and annotated bibliography of the Republic of China*. (1958~1959, 1959~1960). Taipei, 1960~1962, 2v.

【178】 National Central Library *The monthly list of Chinese books*. Taipei, 1960~.

【179】 中華民国出版圖書目録彙編 (1949~1963)。国立中央図書館編、台北、1964、2v.

がある。【175】は1949年から1960年までの間に、国立中央図書館に入った図書目録。台湾では出版法により、図書が出版されると、その一部は必ず国立中央図書館に納本されるのであるから、これは出版目録ともいうことができる。【176】・【177】は、これら納本書の中から中央図書館がいいと思われるものだけを選択したもの。後者【177】には解説がついている。【178】は中国名を新書簡報というもの。これは毎月納本された図書の目録と、中央図書館が推薦する図書の目録。月刊であるが、【175】をつぐものといってよからう。【179】は、【175】【178】をあわせてつくった1949年から1963年までの出版圖書目録で、約15,000点が著録されている。

以上は、一般的、総括的な目録であるが、次に部門別

の図書目録に移ろう。まず近代中国に関係の深いものから掲げる。

【180】 Albert Feuerwerker, S. Cheng. *Chinese communist studies of modern Chinese history*. Cambridge, 1961, 287P.

【181】 現代中国の経済。アジア経済研究所編、東京、1962、310P.

【180】は人民中国の成立後に中国で刊行された中国近代史に関する研究書に解説をつけたもの。【181】は、1949年以降、1960年までに中国で出版されたアヘン戦争後の中国経済に関する著作364点に解説をつけたもの。この二者によって、フェアバンク著【165】に欠けている最近中国における研究を補うことができる。

鴉片戦争、太平天国、捻軍、回民起義、洋務運動、中法戦争、中日戦争、戊戌変法、義和団、辛亥革命といった中国近代史上の大事件に関する資料、参考書を知りたいと思う人は、同名の資料集(中国史学会主編、神州国光社出版『中国近代史資料叢刊』)の末尾につけられている「書目解題」をみればいい。但し、太平天国だけは書目解題が単行本で出ている。

【182】 太平天国資料目録。張秀民・王会庵編、上海、1957、224P.

がそれである。このほか、最近の中国人による太平天国研究を知ろうと思うなら、【82】「太平天国史研究文献目録」(『お茶の水史学』6所収)や「太平天国史研究論文目録——中国新聞雑誌之部」(『近代中国研究センター彙報』4所収)がいい。また戊戌変法に関しては、【83】「戊戌変法研究文献目録」(『史論』14・15所収)も見べきであろう。

清末の小説戯曲は、清末研究に欠かせない材料となるが、それにどんなものがあるか、それがどういうものかということは

【183】 晚清小説史。阿英(錢杏邨)著、上海、1937.

【184】 晚清戯曲小説目。阿英編、上海、1954、122P.

をみればわかる。

20世紀の中国に関する文献目録には、さらに次のようなものがある。

【185】 Eugene Wu. *Leaders of twentieth century China; an annotated bibliography of selected Chinese bibliographical works in the Hoover Library*. Stanford, 1956, 106P.

【186】 Ssu-yü Teng, John K. Fairbank. *Research guide for China's response to the*

West; a documentary survey, 1839—1925
Cambridge, 1954, 84 P.

- 【187】 Tse-tsung Chow. *Research guide to the May Fourth movement; intellectual revolution in modern China, 1915~1924.* Cambridge, 1963, 297 P

- 【188】 Chun-jo Liu, *Controversies in modern Chinese intellectual history.* Cambridge, 1964, 207P.

- 【189】 John Israel. *The Chinese student movement, 1927~1937; a bibliographical essay based on the resources of the Hoover Institution.* Stanford, 1959, 29P.

- 【190】 Frederick W. Mote. *Japanese-sponsored governments in China, 1937~1945; an annotated bibliography compiled from materials in the Chinese collection of the Hoover Library.* Stanford, 1954, 68P.

- 【191】 抗戦参攷書目録暨論文索引。広西省政府図書館, 南寧, 1938.

- 【192】 Robert L. Irick, Ying-shih Yü, Kwang-ching Liu. *American-Chinese relations, 1784~1941; a survey of Chinese-language materials at Harvard.* Cambridge, 1960, 296P.

【185】・【189】・【190】は、スタンフォードのフーヴァー図書館の蔵書の中から関係の文献をぬき出し、これに解説をつけたもので、研究者に至便の書。【192】はハーヴァード大学の蔵書について調べたものである。

近代中国の研究で、何と云っても一番多くの研究者の関心と呼ぶのは中国共産党史であろう。中共史に関する資料、参考書の目録には、

- 【193】 Chün-tu Hsüeh. *The Chinese communist movement, 1921~1937; an annotated bibliography of selected materials in the Chinese collection of the Hoover Institution on War, Revolution, and Peace.* Stanford, 1960, 131P.

- 【194】 Chün-tu Hsüeh. *The Chinese communist movement, 1937~1949; an annotated bibliography of selected materials in the Chinese collection of the Hoover Institution on War, Revolution, and Peace.* Stanford 1962, 312P.

- 【195】 Martin Wilbur. *Chinese sources on the history of the Chinese communist move-*

ment; an annotated bibliography of materials in the East Asiatic Library of Columbia University. 1950, 60 P.

- 【196】 「江西ソヴェト関係資料目録」(『近代中国研究センター彙報』3所収)。

- 【197】 「中共党史関係資料目録」(『近代中国研究センター彙報』9・10所収)。

徳田教之編。がある。【193】・【194】はフーヴァー図書館所蔵の中共関係資料の解説書。フーヴァー図書館は、中国外の地の図書館の中では最も豊富な中共関係の資料を収蔵している図書館だから、この目録は中共史研究者にはなくてはならぬものといえよう。【195】はコロンビア大学東アジア図書館に蔵されている中共関係資料に解説をつけたもの。【196】は、陳誠の蔵書楼(石叟資料室)の中共関係資料でマイクロ・フィルムにおさめられたものの目録。【197】は台湾の司法行政部図書館に所蔵されている中共関係資料の一部の目録。石叟資料室と司法行政部図書館とは、中共党史に関する資料を最も豊富にもっている所、それだけにこの目録は貴重である。そのほか、

- 【198】 「中国共産党史研究文献ノート」(『東洋学報』47—3・4所収)。藤田正典著。

- 【199】 「中国共産党史研究資料について」(『成蹊大学政治経済論叢』14—4所収)。宇野重昭著

- 【200】 「中国共産党史考」(『満鉄支那月誌』昭和5年4~6月所収)。大塚令三著。

はいずれも雑誌に載せられたものだが、中共に関する中国文献について知るのに便利である。特に【198】は中共史研究者にとって、いいガイド・ブックといえよう。

中国紅軍の参考書目としては、

- 【201】 Edward J. M. Rhoads. *The Chinese red army, 1927~1963; an annotated bibliography.* Cambridge, 1964, 188P.

がある。

華僑関係の書目には、次のようなものがある。

- 【202】 Uchida, Naosaku. *The overseas Chinese; a bibliographical essay based on the resources of the Hoover Institution.* Stanford, 1959, 134 P.

- 【203】 華僑問題資料目録索引(初編・続編)。中国僑政学会編, 台北, 1956~1957, 2v.

- 【204】 「東亞華僑研究参考書目」(『中共研究民族学研究所集刊』18所収)。李亦園編,

以上は、近代中国に関する特殊の書目、解題、入門書であるが、近代だけに限らない書目、解題の類で、近代の研究者にも役立つと思われるものを、次に一括して掲

げておこう。

- 【205】 中学歴史教師手冊。王芝九・宋国柱編，上海，1958，408P.
- 【206】 工人通俗読物目録。新華書店編，北京，1955，22P.
- 【207】 Wing-tsit Chan (陳栄捷)。 *Chinese Philosophy, 1949~1963; an annotated bibliography of mainland China publications.* Honolulu, 1967, 290P.
- 【208】 Maurice H. Tseng. *Recent Chinese publications on the Chinese language; an annotated bibliography.* New Haven, 1961, 45P.
- 【209】 中国法制史参考書簡介。国务院法制局法制史研究室編，北京，1957，228P.
- 【210】 中国塩書目録（増改訂版）。何維凝編，1951，190・20・28P.
- 【211】 中国農書目録彙編。毛離編，南京，1924，1v.
- 【212】 農業論文索引。陳祖榮・万国鼎編，南京，1933，731・153P.
- 【213】 農業論文索引・続編。朱耀炳編，南京，1935，348・28P.
- 【214】 中国公私経済研究機関及其出版物要覧。国家社会経済研究所編，上海，1936，176・122P.
- 【215】 関于上海的書目提要。胡懷琛編，上海，1935，52P.
- 【216】 馬克思・恩格斯・列寧・斯大林著作中訳文簡目。学習雑誌編輯部資料室編，北京，1957，197P.
- 【217】 近百年來中訳西書目録。国立中央図書館編台北，1958，328P.
- 【218】 中訳日文书目録。実藤恵秀編，東京，1945，43・204P.

これらのうち特に注目されるのは【205】である。これは中学における歴史教師の指導書であるが、終りに1949～1957年に出版された歴史書約600部が紹介されており、また同年間に出版された雑誌の歴史関係論文目録がある。【206】は中国で一般にどんなものを読むべきとされているかを知り得て面白い。

どんな資料、研究があるか、を知るには、以上のような目録を調べてみるわけであるが、そのほか、蔵書の豊富な図書館、研究機関の蔵書目録をみるのがよい。たとえば日本国内で近代中国関係の蔵書の豊富なのは、愛知大学、大阪市立大学経済研究所、京都大学人文科学研究

所、慶応大学、国立国会図書館、中国研究所、東京大学東洋文化研究所、東京大学文学部中国哲学中国文学研究室、東洋文庫、山口大学東亜経済研究所などであるからこれら機関の蔵書目録をみるといい。蔵書目録は印刷して冊子目録になっているのはすくなく、多くのばあいその図書館に行ってカード目録をみることとなるが、冊子目録については次に述べられるであろう。

IV 図書の所在を知る方法

自分が見たいと思う新聞雑誌や書名がわかったら、今度はその所在を探さねばならない。その際、私たちは大体的見当をつけて、ありそうな図書館を訪れるばあいが多いが、蔵書目録の刊行されている図書館もあるから、そういうもので調べられる限り予め調べておいた方がよかるう。では一体、どんな蔵書目録があるのだろうか。それを知るには、

- 【218】 日本における漢籍の蒐集。東洋文庫東洋学インフォメーション・センター編，東京，1961，202P.

がいい。これは、1961年6月までに刊行された日本における漢籍の蔵書目録の目録である。まずこれで、日本にどんな漢籍の蔵書目録があるかを知り、ついで個々の蔵書目録について、自分の探している図書の存在を確かめることになる。漢籍目録の詳細はこれを見てほしいが、日本における主要な漢籍蔵書機関の蔵書目録を少しく列挙しておこう。

- 【219】 帝室和漢図書分類目録・同増加目録（宮内省図書寮——宮内庁書陵部）。東京，1916～1926，2v.
- 【220】 図書寮典籍解題・漢籍篇。東京，1960，305P.
- 【221】 内閣文庫漢籍目録。東京，1956，598・125P.
- 【222】 静嘉堂文庫漢籍分類目録・同続。東京，1930～1951，2v.
- 【223】 尊経閣文庫漢籍分類目録・同索引。東京，1934～1935，2v.
- 【224】 帝国図書館和漢書件名目録。
- 【225】 帝国図書館和漢図書分類目録。
- 【226】 帝国図書館和漢図書書名目録。
- 【227】 東洋文庫漢籍叢書分類目録（増補）。東京，1965，795・49P.
- 【228】 漢籍分類目録・集部——東洋文庫之部。東洋学文献センター連絡協議会，東京，1967，151・42P.



【229】東洋文庫地方志目録。東京, 1935, 273・36 P.

【230】岩崎文庫和漢書目録。東京, 1932, 485・82 P.

【231】東洋文庫近代中国研究室中文図書目録。東京, 1965, 2 v.

【232】京都大学人文科学研究所漢籍分類目録・京都, 1963, 2 v.

【233】京都大学文学部所蔵漢籍目録。京都, 1959, 316・52・111 P.

【234】京都大学漢籍綜合目録(集部)稿。東京, 1966, 335 P.

【235】東京大学文学部中国哲学中国文学研究室蔵書目録。東京, 1965, 1 v.

【236】東京大学東洋文化研究所大木文庫目録。東京, 1959, 168・46 P.

【237】大阪府立図書館漢籍目録(叢書之部・四部之部)。大阪, 1964~1966, 2 v.

【238】(アジア経済研究所)蔵書目録。東京,

但し、これら蔵書目録の中には、近代中国の研究に役立つものは余りない。一番いいのは【231】、分類されていない欠点があるが、所在を確かめるには便利である。それにつぐものは、【232】・【235】・【236】。特に【232】と【236】とは、清末の資料を豊富に著録している。なお、愛知大学と山口大学とは、近代中国関係資料を豊富に蔵しているが、愛知大学の蔵書は戦前の霞山会館図書室の蔵書を基とし、山口大学のそれは山口高等商業学校の蔵書を受けついでのものであるから、【110】・【111】霞山会館図書室分類目録・同増加目録、【112】山口高等商業学校東亜関係図書目録をみれば、愛知大学、山口大学の蔵書の大略を知ることができる。

以上はいずれも個々の研究機関、図書館の蔵書目録であるが、今日では、幾つかの図書館、研究機関の蔵書をあわせた綜合目録——ユニオン・カタログが編集されている。図書を検索するには、単独機関の蔵書目録より綜合目録の方が便利であることはいうまでもない。そして綜合目録のばあいは、個々の蔵書目録のばあいとは逆に近代中国の研究に役立つものが多い。

【239】現代中国関係中国語文献綜合目録(1912~1965)。アジア経済研究所編, 東京, 1967, 6 v.

【240】近百年來中国文文献現在書目。東方学会編, 東京, 1957, 838 P.

【241】近畿現存中国近人書目。倉石武四郎編, 1950, 1 v.

【242】アジア地域綜合研究文献目録(5巻)。文

部省大学学術局編, 東京, 1960~1962, 5 v.

【243】アジア・アフリカ地域特定研究文献目録。

文部省大学学術局編, 東京, 1965~66, 2 v.

これらの中で一番役立つのは【239】である。これはアジア経済研究所が、1962年から1965年に及ぶ4年にわたって、東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所など近代中国に関する蔵書の比較的豊富な22の日本の研究機関、図書館の蔵書を調査し、これら蔵書の中から1912年以降に刊行された中国文図書をぬき出して作った綜合目録である。社会科学編(3冊)、総記自然科学篇(1冊)、人文科学篇(2冊)に分類されているが、各篇は書名によって排列されている。以上の6冊は既刊。残りの著者名索引・首字対照一覧表(2冊)も近く刊行されるはずである。1912年から1965年に至る間に出版された中国文図書の所在を探すには最も便利なもので研究機関必備の書といえよう。但し、中国研究所、国立国会図書館、愛知大学図書館、東京大学中国哲学中国文学研究部の蔵書が含まれていないのは、残念である。

この欠を若干補うものは【240】である。これには、東洋文庫、東京大学東洋文化研究所とともに、【239】に欠けている国立国会図書館、東京大学中国文学哲学研究室が含まれている。1851年(咸豊元年)から1954年までの約100年間に中国文で出版された図書の綜合目録で、清末が含まれているのも一つの特徴。書名により排列されている。

【240】が東京の図書館に限られているのに対し、【241】は近畿地方の主要図書館——京都大学、東方文化研究所、大阪府立図書館、天理大学附属図書館など——の蔵書、および近畿在住の学者の蔵書の中から、1912年(民国元年)以降の中国文出版物を集めている。関西を主とし、しかも個人の蔵書が含まれている点に、いちじるしい特色がある。また分類されている。

【242】・【243】は、文部省の科学研究費によるアジア地域綜合研究、アジア・アフリカ地域特定研究に参加していた研究機関が購入した図書の綜合目録。これらの研究には中国研究所も参加していたので、この研究所の蔵書の一部はこれで知られる。

近代中国の研究には、直接の関係は余りないかも知れないが、その他の漢籍の綜合目録には、

【244】中国地方誌連合目録。東洋学文献センター連絡協議会編, 東京, 1965, 267 P.

【245】国立国会図書館蔵中国地方志綜録稿。国立国会図書館一般考査部編, 東京, 1950~1964, 17 v.

【246】日本現存明代地方志目録。山根幸夫編, 東

京, 1962, 29 P.

【247】 日本現存明人文集目録。山根幸夫・小川尚編, 東京, 1966, 150 P.

【248】 漢籍叢書所在目録。東洋学文献センター連絡協議会編, 東京, 1965, 99・43 P.

【249】 宗譜の研究(資料編)。多賀秋五郎著, 東京, 1960, 890 P.

【250】 特殊文庫所蔵マイクロフィルム連合目録(1963年現在)。特殊文庫連合協議会編, 東京, 1967, 273・53 P.

等々がある。【244】は東洋文庫, 東京大学東洋文化研究所, 京都大学人文科学研究所, 内閣文庫所蔵の地方志の総合目録。【245】は国立国会図書館蔵の地方志目録ということになっているが, その他, 東洋文庫, 静嘉堂文庫, 宮内庁図書寮, 尊経閣文庫, 京都大学人文科学研究所, 東京大学附属図書館・東洋文化研究所, 天理図書館, 及びアメリカの議会図書館, ハーヴァード大学所蔵のものも含まれている。【245】の方が【244】よりも収録されている図書館がずっと多いわけである。

【248】は東洋文庫, 東京大学東洋文化研究所, 京都大学人文科学研究所, 国立国会図書館, 内閣文庫, 静嘉堂文庫, 天理図書館所蔵の漢籍叢書の総合目録。【249】には東洋文庫, 国立国会図書館, 東洋文化研究所, 人文科学研究所, 内閣文庫, 東京教育大学, コロンビア大学所蔵の宗譜(族譜)の総合目録が含まれている。【250】は1963年現在, 金沢文庫, 宮内庁書陵部, 慶応大学斯道文庫, 静嘉堂文庫, 尊経閣文庫, 天理図書館, 東洋文庫, 内閣文庫が所蔵している国書, 漢籍, 朝鮮本マイクロ・フィルムの総合目録。満蒙本, 安南本, 西藏本も附録されている。

次に海外の蔵書についていささか触れておこう。いわゆる漢籍の類ならいざ知らず, 近代中国研究者にとって必要な図書は, 何と云っても中国自体に問題なく豊富に蔵されている。昔の蔵書目録ですと

【251】 江蘇省立国学図書館図書総目44巻・補編12巻。柳詒徴等編, 1933~1936.

は, 近代中国関係の図書の比較的多いものであった。今日の中国の蔵書目録で近代の多いものは何であるか, 残念ながら私は知らない。

台湾のばあいには, 先に述べた【175】~【179】が, 国立中央図書館の蔵書目録なのだが, このほか,

【252】 (国防研究院図書館) 図書目録(第一輯)。台北, 1960, 427・88 P.

は, 国防研究院図書館が1949~1959年の10年間に収蔵した図書の目録である。

欧米における蔵書目録の代表的なものをあげれば,

【253】 Robert K. Douglas. *Catalogue of Chinese books, manuscripts, and drawings in the Library of the British Museum.* London, 1877, 344 P.

【254】 Robert K. Douglas. *Supplement catalogue of Chinese books and manuscripts in the British Museum.* London, 1903, 224 P.

【255】 *Library catalogue of the School of Oriental and African Studies, University of London.* Boston, 1964, 26 v.

【256】 美国哈佛大学哈佺燕京学社漢和図書館漢籍分類目録。裘開明編, 1938~1940, 3 v.

【257】 哥倫比亞大学東亞図書館中文新書目(1960~)。

【258】 胡佺図書館蔵中国共産主義運動中文書籍目録。

等がある。【256】・【257】・【258】は, それぞれ, ハーヴァード大学, コロンビア大学, フーヴァー図書館の蔵書目録。これらアメリカの図書館は, 自己の蔵書の中から特定のテーマに関する資料, 参考書を抽出し, それに解説をつけて出版することをよくやっている。これまで述べた目録の中にもこの種のものたくさんある。これを図書館別に並べれば次の通りである。

フーヴァー図書館 【185】【189】【190】【193】【194】【202】

ハーヴァード大学 【165】【192】

コロンビア大学 【195】

また地方志の目録は, 日本でも, 既に述べたように, 【229】【244】【245】【246】などいろいろ出ているが, 海外でも地方志の総合目録は幾つかある。地方志目録作成の際に, いつも基礎として使われるのは,

【259】 中国地方志綜録(増訂本)。朱士嘉編, 上海, 1958, 318・105 P.

であるが, これは北京図書館をはじめとする28の中国図書館所蔵の地方志の総合目録である。このほか海外の地方志目録には,

【260】 台湾公蔵方志聯合目録。国立中央図書館編 台北, 1957, 107・30 P.

【261】 国会図書館蔵中国地方志目録。朱士嘉編, ワシントン, 1942, 552・21 P.

【262】 Y. Hervouet. *Catalogue des monographies locales chinoises dans les bibliothèques d'Europe.* Paris, 1957, 100 P.

がある。

V 雑誌の所在を知る方法

次に新聞・雑誌の所在を探すにはどうしたらいいか。それには大きな図書館を訪れてみるとか、図書館所蔵の定期刊行物の目録をみるわけであるが、今これらの目録を掲げることは略する。ただ中国専門のものとして、

【263】 中国朝鮮関係所蔵雑誌目録。一橋大学経済研究所編，東京，1966，95 P.

【264】 「愛知大学所蔵中国文雑誌目録」(『愛知大学国際問題研究所紀要』36所収)。今泉潤太郎編。

があることを記しておく。

海外の図書館の中国文雑誌の所蔵目録には、

【265】 北京大学図書館中文旧期刊目録(上・中編)。北京，1956～1957，2 v.

【266】 上海市報刊図書館中文期刊目録(1881～1949, 1949～1956)。上海，1956～1957，2 v.

【267】 国立中央図書館期刊目録。台北，1966，215 P.

【268】 *Catalogue of mainland Chinese magazines and newspapers held by the Union Research Institute*. Hong Kong, 1962, 1 v.

がある。

中国文の新聞雑誌には、また幾つかの総合目録が内外で出ている。

【269】 日本主要研究機関図書館所蔵中国文新聞雑誌総合目録。市古宙三編，東京，1959，171 P.

【106】 日本文・中国文・朝鮮文等逐次刊行物目録。東洋学文献センター連絡協議会編，東京，1963，178 P.

【105】 学術雑誌総合目録・人文科学和文編(1959年版)。文部省大学学術局編，東京，1959，560 P.

以上はいずれも日本のもの、【269】には東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所、国立国会図書館、中国研究所など23の主要機関が含まれておりまた雑誌だけでなく新聞も含まれていて、便利である。ただいささか編集が古く、もっと新しいものまで含むとなると【106】がいいだろう。但し、含まれる研究機関は東洋文庫、東大東洋文化研究所、京大人文科学研究所の三者に限られ、また新聞は収録されていない。【105】は日本の大学に所蔵されている邦文、中文雑誌の総合目録。残念ながら調査は十分でなく、誤りも多い。

中文雑誌の最も多く収録されている目録は、

【270】 全国中文期刊聯合目録(1833～1949)。全

国図書館聯合目録編輯組編，北京，1961，1252・16 P.

であろう。これは北京図書館、中国科学院図書館、中国人民大学図書館など50の中国にある研究機関所蔵の中文雑誌の目録である。

欧米にあるものは、次のものでわかる。

【271】 Bernadette P. N. Shih, Richard L. Snyder. *International union list of Communist Chinese serials, scientific, technical and medical, with selected social science titles*. Cambridge, 1963, 148 P.

【272】 G. Raymond Nunn. *Chinese periodicals, international holdings, 1949～1960; Indexes and supplements*. Ann Arbor, 1961, 2v.

【273】 Y. Hervouet. *Catalogue des périodiques chinois dans les bibliothèques d'Europe*; Paris, 1958, 102 P.

【274】 British Museum, *Chinese periodicals in British libraries*. London, 52 P.

【271】は、自然科学に主力が注がれ、人文科学、社会科学関係の雑誌は精撰されているが、中共の雑誌が一番多く収録されたもの。調査された図書館は28(アメリカ18, 日本3, イギリス3, カナダ3, 香港1)である。

VI その他

書目・解題・索引の類はまだまだ沢山ある。もっと詳しく知ろうと思う人は、既に述べた図書・論文目録や

【275】 全国図書館書目彙編(1949～1957)。馮秉文編，北京，1958，144 P.

【276】 Columbia University, East Asian Library. *Modern China, 1912～1949; a bibliographical guide. Part I: Bibliography of bibliographies*. New York, 1965, 45P.

【277】 Centre for East Asian Cultural Studies. *A survey of bibliographies in Western languages concerning East and Southeast Asian studies* Tokyo, 1966, 227 P.

を見ればいい。【275】には、1949年から1957年の間に中国で編集された、或は編集の準備がされた書目・解題・索引の類約2400種があげられている。

このほか前号の『近代中国研究の手びき』で述べた。

【117】 近代中国関係文献目録彙編(1945～1960)。東洋文庫近代中国研究室，東京，1960，44 P.

【118】 Centre for East Asian Cultural Studies. *Bibliography of bibliographies of East Asi-*

an studies in Japan. Tokyo, 1964, 190P.

も役立つであろう。【117】は近代にしばられていて便利。【118】では日本人のつくった中国に関する書目・索引を調べることがきる。

近代中国に関係ある図書や新聞・雑誌の編集・翻訳・出版・印刷に関する史料——発刊詞・序文・宣言・出版法規・目録、その他、出版関係の情報など——を集めたものに、

【277】中国近代出版史料（初編・二編）。張静廬編，上海，1953～1954，2v.

【278】中国現代出版史料（甲・乙・丙・丁編）。張静廬編，北京，1954～1959，4v.

【279】中国出版史料（補編）。張静廬編，北京，1957，30・596P.

がある。【277】は1862年から1918年まで、【278】は1919年から1949年までの史料を集め、【279】はこの両者の補遺というべきもの。何れも近代中国の研究者に大いに役立つ。これらに含まれているいろいろな目録類は、この手びきの末尾に附録する。

中国における新聞・雑誌発行の事情に関して知るには

【280】中国報学史。戈公振著，上海，1928，385P. が最も便利である。また最近の中国・台湾・香港で出版されている社会科学関係雑誌・集刊の紹介は、

【281】U. S. Department of Commerce, Bureau of the Census. *Bibliography of social science periodicals and monograph series : Mainland China, 1949~1960.* Washington, D. C., 1961, 32P.

【282】U. S. Department of Commerce, Bureau of the Census. *Bibliography of social science periodicals and monograph series : Republic of China, 1949~1961.* Washington, D. C., 1961, 24P.

【283】U. S. Department of Commerce, Bureau of the Census. *Bibliography of social science periodicals and monograph series : Hong Kong, 1950~1961.* Washington, D. C., 1962, 13P.

に見られる。いずれもアメリカ議会図書館にある雑誌集刊について解説をし、各雑誌とも最新号の中から代表的な論文5篇を選び出してその論文名を掲げている。

近代中国研究者にとって何よりも便利なのは、そして特に中共史研究者にとっては座右におくべきものは、

【284】Peter Berton, Eugene Wu. *Contemporary China ; a research guide.* Stanford, 1967, 695P.

であろう。これは『現代中国研究指南』であって、1949年以降の中国研究者のガイド・ブック。しかし、1949年以降の現代中国の研究者でなくても、民国以降の中国研究者には、大いに役立つ参考書である。全体が4部に分れている。第一部には文献目録・解題・索引、第二部には事典・年鑑・手冊・統計・人名表・辞典・年表などの参考書、第三部には基本資料、第四部には定期刊行物を掲げ、親切な解説を各文献についてつけている。また巻末には、世界各国の現代中国研究に役立つような研究機関、図書館を列挙紹介し、アメリカ大学における現代中国をテーマとした学位論文を列記する。

【285】中国近代史参考書目初編（1842～1919）華東師範大学歴史系資料室，1962，93P.

は著書論文を書名で配列したもの。便利である。

なお中国人の研究論文を探すのに役立つものは、前号の『近代中国研究の手びき——日本人の研究論文を探す方法』に記したものの中に沢山ある。各項末に「C」とサインしたものは、みなそれに当るわけであるが、特に

【1】東洋学文献類目。京都大学人文科学研究所編。は最近の中国人の研究論文を探すにも一番便利である。

また内容の紹介されているもののほしい人は、

【9】*Revue bibliographique de Sinologie*, によればいい。

VII 附 録

【277】中国近代出版史料，【278】中国現代出版史料【279】中国出版史料の中から、目録・解題の類を摘挙すれば、次の通りである。

中国近代出版史料・初編	
外資経営的中文報刊（戈公振）	66～77
清季重要報刊目録	77～97
辛亥革命雑誌録	97～103
清末小説雑誌略（阿英）	103～110
中英鴉片戦争書録（阿英）	110～115
甲午中日戦争書録（阿英）	115～133
庚子八国聯軍戦争書録（阿英）	134～139
辛亥革命書徴（張於英）	140～183
教科書以前の童蒙読物	215～219
中国近代出版史料・二編	
近代国難史籍録（魏如晦）	120～147
丁未年（1907年）小説界発行書目調査表	265～275
辛亥前海内外革命書報一覽（馮自由）	276～297
清末民初京滬画刊録——1875～1918年	297～301
民国初期的重要報刊	301～316

現ニ吉
修水、

周乘竜報

共産党

運動ヲ

対的自由

リ。為

ニシテ、

スヲ得

個月ヲ

上更ニ

方ニ異

ノ自由

ノ子ヲ

トスル

引取ラ

男女双

党ニハ

養シ能

トス。

婦女子

従事ス

セル女

レテ密

南昌監

テ有罪

江西共

二者ニ

其ノ反

ヲ負セ

ニシテ

壞セラ

政府軍

対ニ、

一大原

従来、

ル処、

ル見地

決シ、

テ処決

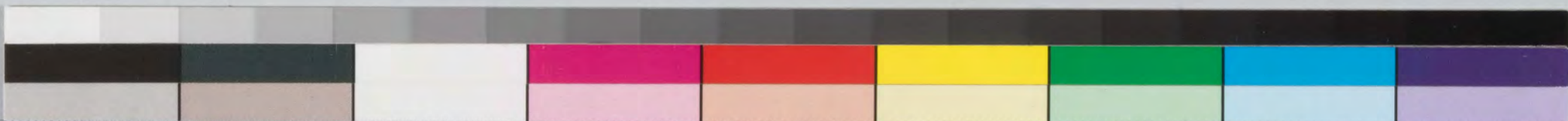
為スヲ

ニシテ

不可能

○共産党

般民衆



中国現代出版史料・甲編	(陸丹林)	385~387
第一次国内革命戦争時期出版物簡目(静)	50年来新聞出版印刷書刊目錄(張卒)	413~422
	68~78	
1919~1927年全国雑誌簡目(静)	86~106	
初期新文芸出版物編目——1919~1923年(蒲梢)	107~121	
漢訳東西洋文学作品編目——1929年3月止(蒲梢)	271~323	
李大釗先生著述年表(張次溪)	458~468	
中国現代出版史料・乙編		
1929年中国關於社会科学的翻譯界(君素)	7~18	
第二次国内革命戦争時期蘇区出版物簡目(静)	24~31	
国民党反動政府查禁228種書刊目錄		
——1931年	173~189	
国民党反動派查禁149種文芸書の經過(魯迅)		
——1934年	190~205	
国民党反動派查禁676種社会科学書刊目錄		
——1936年	205~254	
中訳蘇俄小説編目(蒲梢)——1930年5月止	280~289	
辛亥革命以來紀述中国戲劇(京劇)書録		
附・音楽書目(張次溪)	379~390	
辛亥以來紀述北京歴史風物書録(張次溪)	390~407	
1935年全国画刊名録(蔣蔭恩)	415~417	
全国外人刊行主要日報表——1932年	418~421	
中国現代出版史料・丙編		
国民党反動派查禁文芸書目補遺(静)	144~164	
——1929~1936年		
「七七」事変前被国民党反動派查禁の報刊目錄		
——1936年11月~37年6月	164~172	
国民党反動派查禁961種書刊目錄——1941年	173~238	
重訂魯迅著訳書目(唐弢)	282~313	
郭沫若先生25年著訳編目——1941年11月止(柳倩)	313~327	
茅盾先生著訳目錄——1945年	328~330	
抗戦初期内地出版戲劇目——1937~1939年(舒暢)	330~352	
華中根拠地戲劇書目録(錢瓔・小梅)	352~379	
華中解放区報紙雜誌一覽——1945年(盧子培)	379~384	
外国記者關於老解放区情況報導の中訳本書目		
中国現代出版史料・丁編		
1931~1936年間上海出版の幾種革命報刊簡介	142~152	
(楊瑾璋)		
国民党反動派查禁報刊目錄——1929~1931年	153~160	
(李默等整理)		
国民党反動派查禁書刊補遺——1929~1931年	161~176	
(李默等整理)		
1936年国民党反動派查禁刊物目錄及調査表		
——1936年1月~3月(李默等整理)	177~182	
1948年各解放区出版の報紙	370~373	
1948年国民党反動派摧殘新聞事業罪行録	374~378	
抗戦8年来の戲劇創作——一個統計資料:1946年		
(田進)	460~463	
高爾基作品中訳本編目——1947年(戈宝権)	463~493	
晚清以來文学期刊目錄簡編,附・反動刊物		
(魯深)	510~583	
五四以來新詩集簡目補遺(魯深)	583~589	
紀述北京歴史風物書録補遺(張次溪)	589~619	
1949年全国公私营圖書出版業調査録	681~702	
中国出版史料・補編		
中国各報存佚表(梁啓超)	67~75	
新旧各報存目表——1872~1902年	75~81	
紀述辛亥革命史蹟書録(張次溪)	185~250	
第一次国内革命戦争時期各地学生聯合会刊物	266~267	
1930年全国革命報紙調査	316~318	
外人在華新聞事業調査表——1933年	333~340	
外国在華報紙——1939年(胡道静)	341~357	
1946年各解放区出版の報紙	367~370	
上海淪陷後兩年来的出版界——1942~1944年		
(楊壽清)	376~400	
馬克思・恩格斯著作中訳本年表——1906~1949年		
修訂稿(張静廬)	442~451	
列寧著作中訳本年表——1920~1949年:修訂稿		
(張静廬)	452~466	
斯大林著作中訳本年表——1924~1949年:初稿		
(張静廬)	466~475	
蘇聯戲劇理論和戲劇創作中訳本書目——1921~		
1949年9月(葛一虹)	485~493	
五四以來新詩集簡目・初稿(魯深)	493~513	
紀述北京歴史風物書録補(張次溪)	514~553	
出版大事年表——1918~1949年	580~596	



中国の文化大革命に関する 日本雑誌論説目録(3)

- 1) この目録は、「彙報」8, 9号に続いて, 1967年7月号から1968年3月号までの日本の雑誌から, 中国のプロレタリア文化大革命に関する論説を抜き出したものです。
- 2) とりあげた雑誌は, 国会図書館発行の「雑誌記事索引」収録のものに若干を加えました。
- 3) 各論説は, 月毎に雑誌名の五十音順に配列しました。また著者名, 題名のあとに, 雑誌名, 巻号, 掲載ページを記しました。

1967年6月以前

- 文芸整風運動について 外務省調査月報8-2(2月) 111~126
- 思想の動向——紅衛兵運動と毛沢東の神格化 立命館文学260(2月) 90~94
- 北京紅衛兵第2司令部造反派のよびかけ 世界革命運動情報2(3月) 63~67
- 中国プロレタリア文化大革命基本テーゼ集 同上 68~72
- 福本和夫: プロレタリア文化大革命に寄せて マルクス主義公論25(3月) 3~12
- 三宅英生: 人民公社にたいする本来のマルクス主義からの検討——文化大革命における毛沢東のジレンマ 同上 13~19
- 三宅英生: 「造反」運動の指導性と分散性——毛沢東思想における「個」の理解をめぐって 同上 20~24
- 津田天瑞: 国際関係からみた「文化大革命」 外務省調査月報8-4(4月) 1~14
- 上別府親志: 「文化大革命」の分析と展望 同上 15~21
- 川口晃: 「文化大革命の底流」——近代化過程をめぐる二つの立場の激突 同上 22~71
- 上別府親志: 中共文化大革命の新段階 官公労働21-4(4月) 17~19

6 月

- 浅川謙次: 人民裁判にかかる瞿秋白 アジア経済旬報

- 685 6~10
- 農村社会主義教育運動における若干の具体的政策についての中共中央の規定(下) 同上 16~22
- 本橋渥: 劉少奇批判の経済学——経済研究所所員との懇談メモを中心に アジア経済旬報686 1~6
- A. L. ストロング: 広東周辺の文化革命 同上 7~17
- 浅川謙次: プロレタリア文化大革命のさなかに迎える「延安文学芸術座談会」での講話、25周年 同上 18~21
- 毛沢東: 文芸問題について アジア経済旬報687 7~11
- 小島晋治: 映画《武訓伝》批判をめぐって——一つの感想 同上 12~16
- 西川景文: 文化大革命と宗教の運命 同上 19~22
- 土井章: 毛沢東コースと劉少奇コース エカフェ通信482 1~21
- 石川忠雄: 中国の文化大革命 共産圏の動き19 1~18
- 岩田弘等(シンポジウム): 文化大革命か社会大革命か——過渡期社会の階級闘争 共産主義10 114~132
- 今村与志雄: 再び周揚批判の扱い方について——丸山昇氏の反論に答える 書報3 2~13
- 川田侃: 中国を訪ねて——文化革命の経済的側面 資料平和経済73 24~32
- 尾崎庄太郎: 中国における社会主義建設の停滞と問題点 世界経済評論11-6 4~12
- 米沢秀夫: 中国の農業政策——人民の公社運動を中心として 同上 25~30
- 藤井高美: 中国の文化大革命 世界思想1 16~18
- 激化する中共の武闘——反毛派, 巻き返しに出る 世界週報48-26 11~12
- 戚本禹: 愛国主義か売国主義か——反動映画《清宮秘史》を評す(下) 大安13-6 12~20
- 土居明夫: 周恩来は事態を收拾しうるか 大陸問題185 4~12
- 浜野正巳: 中共人民解放軍内部の諸問題 大陸問題



- 185 12~22, 187 36~43
 宋重陽：英雄のはかなき夢「文化大革命」 大陸問題
 185 51~57
 増田渉：中国を訪ねて(2)——北京 中国43 25~
 33
 新島淳良：上海・北京無産階級革命派奪権闘争年表
 中国研究月報232 附録1~3
 尾崎秀樹：もう一つの「なぜ」——中国の作家たちと語
 って 図書新聞915
 藤村俊郎：中国の文化大革命の論理と構造(5~10)
 みすず97 31~38, 98 29~37, 99 47~54, 100
 63~70, 102 53~60, 103 53~61
- 7 月
- 影山三郎：「魂にふれる」とはなにか?——郭沫若氏に
 きく文化大革命 朝日ジャーナル9-28 89~92
 菊地昌典等：現代の偉人と個人崇拜——アンナ・ルイス
 ・ストロング女史にきく 同上 92~96
 劉少奇の「認罪書」 朝日ジャーナル9-32 100~
 104
 中国科学院・経済研究所東方紅兵団：野心家No.1が経済
 活動で宣伝した謬論をやっつけよ アジア経済旬
 報688・689合併号 1~7
 A. L. ストロング：最初の革命的な大字報をはった聶元梓
 同上 8~10
 尾崎秀樹：大字報をみる民衆の表情——作家代表団訪中
 報告 同上 15~30
 浅川謙次：革命委員会成立後の北京——三結合の進展状
 況と授業再開 アジア経済旬報690 1~8
 長谷川敏三：文化大革命の広州交易会——経済交流に新
 しい芽生え 同上 9~14
 内藤昭：社会主義的生産関係と階級矛盾——中国文化大
 革命の基礎的条件 アジア研究14-2 1~23
 本橋渥：文化革命と中国の経済政策——中国の社会主義
 経済政策の展開と方向 潮別冊6 166~175
 蠟山芳郎：文化大革命と中国の外交政策——歴史的把握
 を中心に エコノミスト45-29 36~42
 文化大革命の影響——中共科学の総点検 経済往来19
 -7 107~112
 中西功：今日の中国における二つの道(上, 下) 経
 済評論16-7 70~82, 16-8 126~137
 小野田一：文化革命のなかの日中貿易 現代の眼8-
 7 132~137
 藤村俊郎：文化大革命と大躍進 現代の理論42 5~
 19
 井汲卓一：造反有理 同上 20~25
- 菊地昌典等(シウボジウム)：見聞した中国文化大革命
 同上 26~61
 大島康正：さまよえる共産主義的人間像——東欧・ソ連・
 中共のそれぞれの歩み 自由9-7 10~25
 文化大革命をどう捉えたか——文献総目録(4~7)
 週刊読書人682~685
 田村紀雄：日本の論壇は「文化大革命」をどう捉えたか
 ——その論争点を整理する 週刊読書人686
 ペ、フェドセーエフ：マルクス主義と毛沢東主義 新
 世界ノート33 57~71
 プロレタリア独裁の下で革命を進める理論的武器(紅旗
 第10号社説) 世界週報48-27 48~53
 立花丈平：事実上の無政府状態——混乱の度を増す中共
 の政情 世界週報48-28 56~59
 毛沢東思想はわが党が勝利のうちに前進する道を明るく
 照らしている(紅旗第11号社説) 世界週報48-
 29 40~43
 金雄白：劉少奇打倒成らず——失敗つづきの奪権闘争
 世界週報48-30 50~53
 梁夢廻：江青の「京劇の革命について」 大安13-7
 2~5
 毛主席の文学芸術に関する五文献 同上 5~7
 新島淳良：杭州にて——文化大革命下の中国紀行(1)
 同上 8~13
 一羊：《毛主席語録》は果して祈禱書か——《人民中国》
 5月「プロレタリア文化大革命」特集号を読んで
 同上 18~19
 木下実：激動する中国に行く 第三文明77 78~85
 村松祐次・土居明夫(対談)：文化大革命を歴史的にみ
 る 大陸問題186 6~23
 大陸問題研究所：ある中国人のみた文化革命 同上
 56~57
 衛藤藩吉・岡部達味：中国革命における穏歩と前進
 中央公論82-8 50~69
 紅衛兵新聞——1967年1月 中国44 4~33
 中島嶺雄：日本知識人の中国像——左翼的知性批判
 展望103 76~87
 尾崎秀樹：中国紀行——文化大革命下の中国文学 日
 本文学16-7 67~72
 韓弘建：「文化革命」と「九・三〇事件」について
 同盟108 32~43
 武田泰淳・竹内好：私の中国文化大革命観 文芸6-
 7 166~187
 池上貞一：文化大革命における政治闘争 法経論集
 (愛知大学)54 101~133
 石川忠雄・村松暎(対談)：この目で見た中国——文化

- 大革命をめぐる 三田評論 10~25
- 大塚有章：「毛沢東語録」解説（5）——革命的英雄主義について 毛沢東思想研究2-7 33~39
- 偉大な歴史的な文書（紅旗・人民日報共同編集論文）
同上 59~61
- 「修養について」という本の要素はプロレタリア独裁を裏切ることである（紅旗・人民日報編集部論文）
同上 61~64
- 8 月
- 好機を逸した中共党中央——やっと収拾された武漢事件
朝日ジャーナル9-34 6~8
- 川添登：「文化大革命」下の中国の対外関係（上、中、下の1、2） アジア・アフリカ研究7-8 15~48, 7-9 13~42, 7-10 9~28, 7-11 29~50
- 新島淳良：劉少奇批判の問題点（4） アジア経済旬報692 1~14
- 中国科学院・経済学研究所東方紅兵団：反動的な「搾取有功」論を徹底的に批判せよ 同上 18~24
- 新島淳良：広東—北京——劉少奇批判のたかまり アジア経済旬報693 1~4
- 田中脩二郎：プロレタリア文化大革命と日中貿易——友好貿易の本質 同上 5~12
- 菅沼正久：中国における二つの道の闘争 同上 15~21
- 新井宝雄：文化大革命と毛沢東の指導 潮86 126~134
- 中島嶺雄：中国の水爆と毛沢東思想 同上 148~156
- 釜井卓三：文革下の中国工場 エカフエ通信490 1~31
- 宇都宮徳馬：文革下の中国を歩く——この人と1時間 エコノミスト45-32 36~41
- 中国共産党中央委員会が1966年5月16日に出した通知（北京放送1967年5月18日） 共産圏問題11-8 101~106
- 毛主席揚子江を渡る（チャイナ・クォーターリー〈クロニクル・アンド・ドキュメンテーション〉1966・No.28より） 自由9-8 112~115
- ア. ネクラソフ：「大躍進」から「文化大革命」まで 新世界ノート34 56~63
- 「文化大革命」のなぞを解く（ノーボチス通信） 同上 64~71
- M. ラザレフ：紅衛兵と法秩序 同上 101~111
- 貝塚茂樹：ニュースの真実性について——中国文化大革命の報道をめぐる 新聞研究193 5~9
- 本橋渥：文化革命下の中国経済——激動の中国を訪れて 世界経済評論11-8 33~36
- 立花丈平：中共、大学を再開——狙いは武闘阻止と革命教育 世界週報48-31 30~33
- 軍内部にも強大な反毛派——重大な意味を持つ武漢事件 世界週報48-32 6~8
- 金雄白：挫折した「三結合」奪権——明るみに出た林彪の実力 同上 32~43
- 桑原寿二：文革挫折の象徴——武漢反乱は一大転換 世界週報48-34 14~21
- ソ連紙、一斉に反毛論評 同上 22~24
- 金雄白：武闘の嵐吹き荒れる——革命造反派の内部分裂 同上 41~49
- 文化大革命の奇形児——紅衛兵騒動の一年間 世界週報48-35 6~9
- 吳叔同：巧妙に抵抗する知識人——大陸人民の不满広がる 同上 62~65
- 人民日報・紅旗編集部：社会主義の道を歩むか、それとも資本主義の道を歩むか 同上 66~74
- 中国の「プロレタリア文化大革命」にかんする文献 世界政治資料266 17~97
- 「紅衛兵」の壁新聞その他から 同上 98~158
- 新島淳良：南京の文化大革命——文化大革命下の中国紀行（2） 大安13-8 5~8
- 池田正之輔・土居明夫（対談）：マスコミの中共報道を叱る 大陸問題187 6~27
- 本橋渥：劉少奇批判の経済論 中国研究月報234 1~22
- 中共「文化大革命」主要関係年表（1966.12.1から1967.6.30まで） 調査月報（内閣調査室）12-8 1~14
- 1966年10月党中央工作会議における毛主席の発言 同上 15~18
- 小川圭治・飯坂良明・宋戸寛（討論）：中国文化大革命と毛沢東思想——その神学的評価 福音と世界22-8 14~25
- 西野辰吉等（座談会）：中国文化大革命と文学芸術 民主文学21 6~40
- 梶大介：燃える中国 毛沢東思想研究2-8 65~73
- 「赤旗」の『紅衛兵』のわが党にたいする下劣な攻撃について」を評す（北京航空学院『紅旗』） 同上 85~89
- 《資料紹介》中国文化大革命（8）——鄧拓の『燕山夜話』は反党・反社会主義の黒い話である（2） 同上 90~96

9 月

- 松野谷夫：文闘のなかの武闘——中国革命路線の混乱
朝日ジャーナル9—37 16~22
- 伊藤斉：もの云わぬ劉・鄧派——中国革命路線の混乱
同上 22~24
- 伊井健一郎：『プロレタリア文化大革命』見聞記 ア
ジア経済旬報694 1~7
- 竹内信雄：大寨における階級闘争——陳永貴さんの話し
を中心に 同上 8~12
- 簡野厚：中国の工場と労働者のたたかい 同上 13~
18
- 宮川恭子：人民公社での『下放』体験記——広州市南海
県人民公社の4日間 同上 19~24
- 竹内信雄：文芸界の厳しいたたかい 同上 25~32
- 浅川謙次：いっせいに消えた齊白石の画——北京通信
アジア経済旬報696 1~4
- 板垣望：紅衛兵展覧会 同上 4~11
- 安藤彦太郎：北京への道——中国通信 同上 12~20
- 西園寺一晃：文化大革命と中国学生——北京大学での造
反派過程を中心として 同上 21~31
- 小田切秀雄：社会主義における二つの自由——その動い
ている姿 潮87 176~194
- 土居明夫：毛沢東の文化革命は成功するか 外交時報
1044 4~11
- Yang Tsang-hao：チベットにおける権力闘争の発展
——陳伯達・江青派と林彪派が衝突 同上 53~
56
- 村松祐次：文化革命下の中国を視察して 共産圏の動
き20 1~13
- 石川忠雄：文化革命下の中国を視察して 同上 14~
27
- 松下輝雄：文化大革命とプロレタリア独裁の法理 共
産圏問題11—9 11~39
- 橋本洋二：文化大革命と社会主義経済の諸問題——劉少
奇批判の諸論文から 月刊社会党125 78~83
- 中国「武闘外交」のねらい 現代の眼8—9 42~44
- 山崎春成：中国文化大革命と社会主義観の混迷 現代
の理論4—9 67~74
- 村松祐次：文化革命の新段階 国際問題90 2~9
- 泉鴻之：文化大革命とソ連 同上 30~37
- 森田節男：中国の『新外交路線』と文化革命の現状——
香港筋の情報を通じて コリア評論78 4~12
- F. プラツキー：権力奪取闘争か政治路線の衝突か
新世界ノート35 127~135
- ヤ. ミハイロフ：中国のブルジョアジーにたいする毛沢

東の政策 同上 136~141

- 文化大革命この一年 新聞月報247 14~32
- 文化大革命の進展と中国外交 世界262 13~18
- 宇都宮徳馬：文化大革命と毛沢東——七回目の訪中から
帰って 同上 82~87
- 陳毅副総理との会見記 同上 88~97
- 山田慶児：コンミュン国家の成立——造反有理（1）
同上 98~114
- 英公館焼き打ちの暴挙——常軌を逸した紅衛兵外交
世界週報48—36 6~11
- 立花丈平：収拾のメドつかぬ文革——毛沢東派ますます
苦境へ 同上 28~31
- イ. アレクサンドロフ：中国人民の利益に反して 同
上 32~37
- 躍り出た無名の新人——党中央宣伝部長・王力 世界
週報48—37 33
- 森永和彦：中共「隔離」の政策——英、紅衛兵外交に対
処 同上 34~37
- 金雄白：旧怨に全面的に報復——創党以来の毛劉の対立
同上 38~47
- 永淵清敏：重大化した広州情勢——「農村から都市包囲」
の態勢 世界週報48—38 42~45
- 金雄白：実権派九人の『罪状』——紅衛兵の厳しい糾弾
同上 68~78
- レオニード. プレジネフ：反共、反革命の毛路線——反
毛派の最終的勝利を確信 世界週報48—39 32~
40
- 志村規矩夫：林彪・江青の対立目立つ——国府から見た
中共情勢 同上 70~73
- 松岡正子：文化大革命——中国留学記（5） 大安13
—9 14~16
- 武漢武闘は何を意味するか 中央公論82—10 42~43
- 宇都宮徳馬：現下の中国と日本の外交——文化大革命下
の中国を見て 展望105 27~36
- 山田慶児：人民の権力・人民の軍隊——中国における新
しい権力の構想 同上 37~47
- 大塚有章：『毛沢東語録』解説（7）——階級の問題に
ついて 毛沢東思想研究2—9 42~47
- 周総理が語る文化大革命と核兵器問題 同上 86~89
- ≪資料紹介≫文化大革命（9）——中国東北の奪権闘争
（潘復生） 同上 90~92

10 月

- 奪権から思想闘争へ——文革二年目の中国国慶節 朝
日ジャーナル9—43 8~9
- 毛沢東：清華大学附属中学紅衛兵への手紙（1966年8月

2~177
同上
298~308
——経済
45 83~
眼9—1
思想
同上
と問題点
1 17~
上 40~
題点
済評論12
ねらう毛
命下の中
権は林・
よう（人
同上
共外交
物 大
大陸問題
1 表紙
42~43
伝 同



- 1日) アジア経済旬報697 1~2
 安藤彦太郎：革命の表情，擁軍愛民——中国通信（2，3） 同上 3~22
 安藤彦太郎：済南一瞥——中国通信（4） アジア経済旬報698 1~8
 浅川謙次：中国のペトフィー・クラブ——北京通信 アジア経済旬報699 10~11
 本橋渥：文化大革命の論理と帰趨——その一年の経過と新しい問題 潮88 226~241
 土井章：社会主義教育運動と文化大革命との関連 エカフェ通信495 1~32
 小林文男：文化大革命の論理——内部矛盾か敵対矛盾かエコノミスト（10月17日号） 46~56
 江頭数馬：文化大革命の横顔——北京通信 季刊東亜 1 50~56
 古賀登等（座談会）：アジアの变革と世界史の転換 同上 72~101
 古在由重・横山正彦・米沢秀夫（座談会）：「文化大革命」を語る——北京空港暴力事件への抗議をこめて 経済42 138~155
 徐訐：毛沢東哲学の矛盾 経済往来19-10 176~191
 8月21日付「赤旗」主張「攪乱者への断固とした回答」の学習のために 月刊学習81 47~66
 山田慶児：人民解放軍と文化大革命 現代の理論45 85~97
 黒柳明：苦悶する中国文化大革命 公明60 102~111
 関根弘：めちゃくちゃとけっこう 思想の科学67 48~53
 富士正晴：中国文化大革命の印象 同上 54~57
 衣笠哲生：中ソ論争と文化大革命 社会主義192 96~108
 杉森康二：中国の権力闘争と組織の論理——組織論的にみた中国文化大革命について 社会主義運動28 24~33
 ユ・コシユコフ：「文化革命」と中国の経済 新世界ノート36 104~108
 『大連合』の波 新聞月報248 40~41
 日本三記者の退去令 同上 42~43
 山田慶児：紅衛兵・権力・信仰——造反有理（2） 世界263 165~177
 金雄白：文化大革命の黒幕（上，下）——江青台頭のナゾを探る 世界週報48-42 44~51，48-43 60~70
 桑原寿二：文化革命の新たな出発——『収』の場に追い込まれた主流派 世界週報48-43 16~23
 人民日報・紅旗・解放軍報編集部：プロレタリア独裁下の文化大革命の勝利万歳——中華人民共和国成立十八周年を慶祝して 同上 24~28
 スマルノ・ソスロハルジョノ：私は北京から追放された——恐怖の脱出体験記 同上 54~59
 金雄白：奪権闘争の矛盾——武漢事件はなぜ起きたか 世界週報48-44 70~78
 安藤彦太郎：大批判運動・文闘——北京通信（1，2） 大安13-10 2~15
 岩村三千夫：造反から奪権への記録——文化大革命についてのいくつかの著作を読んで 同上 20~22
 新島淳良：三度目の北京——文化大革命下の中国紀行（4） 同上 23~26
 横田裕：中国の孤立化と文化大革命の今後 第三文明 80 92~97
 浜野正巳：文革一年の中共情勢 大陸問題189 60~67
 小林多加士：中国における社会主義教育運動と経済発展 東洋研究16 144~166
 林克也：文化大革命の発展を辿って 毛沢東思想研究 2-10 4~9
 大塚有章：「毛沢東語録」解説（8）——愛国主義と国際主義 同上 35~40
 宍戸寛：中国の文化大革命 理想413 70~77
- 11 月
- 佐伯有一：中国における歴史研究の現状 アジア経済旬報700 1~9
 若林暹：共産党の組織原則と毛一派による党破壊 月刊学習82 47~52
 長瀬隆：「造反有理」の印象 現代の眼 8-11 160~166
 浅野雄三：文化革命下の対外貿易 同上 171~176
 中国文化大革命に関する邦文文献目録（1~3） 国立国会図書館月報80 22~27，81 22~28，82 21~27
 ゲ・オストロウモフ：中国における政治権力の危機 新世界ノート37 59~70
 馬思聰：私はなぜ中国を脱出したか——「文化革命」の恐ろしい事実 同上 71~77
 ズンヌン・タイポイ：毛沢東には確実な支柱がない 同上 77~81
 おだやかな国慶節 新聞月報249 21~23
 阿部知二：中国に対する日本 世界264 10~18
 北京を追われた日本人記者 同上 225~228
 ミハイル・ヤーコブレフ：中国の悲劇 世界週報48-45 76~80

金雄白：
 世界
 人民日報
 切り
 47
 榊利夫：
 裂主
 柴田徳：
 リズ
 香坂順一
 大原信一
 輿水優：
 新島淳良
 紀行
 安藤彦太
 19~
 藤井彰治
 190
 江頭数馬
 た中
 光岡玄：
 紙を
 竹内芳朗
 視点
 宍戸峰子
 32
 今川元：
 過と
 山下文男
 た中
 土井大助
 39~
 高橋芳男
 64~
 大塚有章
 い、
 ~7
 <<資料編
 書を
 浅井敦：
 ら
 野上正・
 ヤー
 安藤彦太

- 金雄白：蕭華失脚説を探る——江青にいらまれたか
世界週報48—46 79~81
- 人民日報・紅旗・解放軍報編集部：十月社会主義革命の
切り開いた道に沿って前進しよう 世界週報48—
47 34~39
- 榊利夫：毛沢東一派の「再編分化」論を批判する——分
裂主義と攪乱の道具 前衛271 4~32
- 柴田穂：北京報道の実体と追放の真相 総合ジャーナ
リズム研究39 28~33
- 香坂順一：研究所の人びと 大安13—11 2~6
- 大原信一：中国の旅から 同上 7~9
- 興水優：訪中雑感 同上 10~12
- 新島淳良：北京大学の造反経過——文化大革命下の中国
紀行 同上 13~18
- 安藤彦太郎：愚公の精神——北京通信（3） 同上
19~26
- 藤井彰治：重大危局に直面した文化大革命 大陸問題
190 27~33
- 江頭数馬・柴田穂・大宅壮一（座談会）：追放記者が見
た中国の内幕 中央公論82—12 170~179
- 光岡玄：日本共産党の中国観——この1年来の「赤旗」
紙をめぐる 中国研究月報237 1~24
- 竹内芳郎：文化大革命の思想的意義——マルクス主義の
視点より 展望107 23~43
- 宍戸峰子：中国の青年たち 福音と世界22—11 28~
32
- 今川元：「文化革命」から「文化大革命」へ——その経
過と問題点 文化評論74 6~17
- 山下文男：マルクス・レーニン主義の文化革命論から見
た中国「文化大革命」 同上 18~38
- 土井大助：「文化大革命」と毛沢東個人崇拜 同上
39~63
- 高橋芳男：中国「文化大革命」と日本の論壇 同上
64~85
- 大塚有章：「毛沢東語録」解説（9）——敢然とたたか
い、敢然と勝利する 毛沢東思想研究2—11 66
~71
- 《資料紹介》中国文化大革命（11）——陶鑄の二つの著
書を評す（姚文元） 同上 92~101
- 12 月
- 浅井敦：中国文化大革命の論点（1）——訪中ノートか
ら 愛知大学国際問題研究所紀要42 81~108
- 野上正・三好崇一（対談）：北京から帰って 朝日ジ
ャーナル9—52 6~11
- 安藤彦太郎：文革三年目の課題 同上 13~16
- 竹内実：周恩来の役割 同上 18~22
- 高原七郎：文化大革命下の中国の対AAL外交 アジ
ア・アフリカ研究7—12 21~36
- 小林弘二：中国における「共産主義への道」と「延安」
の伝統——文化大革命と「大躍進」時期の検討から
アジア経済8—12 100~114
- 当面の学術討論に関する文化革命5人小組の報告綱要
（1966年2月7日） アジア経済旬報703 14~17
- 中国共産党中央委員会：通知（1966年5月16日） 同
上 17~24
- 「紅旗」編集部・「人民日報」編集部：偉大な歴史的文
献 同上 25~29
- 柴田穂：中国文化革命の視点 共産圏の動き22 1
~20
- 村松祐次：中国文化革命の前夜に至る中ソ両国の経済関
係 共産圏問題11—12 1~18
- 土井章：勝負なき三年越しの文革 経済往来19—12
145~157
- 立原道夫：文化大革命は反革命か——中西功氏の所説を
批判する 月刊社会党128 111~120
- 東谷敏雄：文化大革命と教育改革 現代の理論47
119~126
- 伊藤秀実：自力更正・紅衛兵・労働者 同上 127~
132
- M. スラドコフスキー：脅威をうける中国の社会主義経
済原則 新世界ノート38 99~113
- 大連合下の国慶節 世界265 23~26
- 石川滋：中国経済の新たな選択 同上 70~80
- 各省における奪権闘争の記録——中国文化大革命特別資
料（1） 世界革命運動情報8 52~62
- 志村規矩夫：一時的沈静の段階——周・林・江の矛盾が
表面化 世界週報48—49 62~65
- 中国の農村における二つの道の闘争（人民日報・紅旗・
解放軍報共同論文11月23日） 世界週報48—50
38~46
- 永淵清敏：毛思想の売り込みに躍起——異例づくめの広
州交易会 同上 48~51
- 今日の毛沢東路線と国際共産主義運動（「赤旗」1967年
10月10日） 世界政治資料272 4~49
- 「毛沢東思想」の過去と現在 同上 111~149
- 紅衛兵が公表した毛沢東一派の指示・通達 同上
150~176
- 紅衛兵のつたえる「武闘」の実例 同上 177~192
- 安藤彦太郎：大連合——北京通信（4） 大安13—12
2~13
- 西園寺一見：盲従主義・奴隷主義反対——北京大学のた

- たかいの中から 同上 18~23
- 浅井敦：文化大革命下にみる中国法の論点 同上 24
~26
- 新島淳良：文芸界の消息——文化大革命下の中国紀行
(6, 7) 大安13-12 27~31, 14-1 9~
15
- 浜野正巳：中共文革の波紋 大陸問題191 46~53
- B. I. シュウォルツ・中島嶺雄(対談)：毛沢東思想の
起源について 中央公論82-13 110~117
- 鍾華敏：江青正伝 同上 302~326
- 歴史はあざむく——武漢事件(1967年7月)と西安事件
(1936年12月) 中国51 6~37
- 世界をかける「毛語録」 同上 23, 25, 27, 29, 31
33, 35
- 内山敏：文革と中国経済——「エコノミスト」から
同上 72~74
- C. T. フー：中国の大学——文化大革命の目標 日米
フォーラム13-12 34~42
- 大塚有章：「毛沢東語録」解説(10)——共産党員
毛沢東思想研究2-12 64~69
- 不破哲三：中国「文化大革命」と日本人民の立場 労
働・農民運動21 80~89
- 1968月1年
- 林広吉：「批修」随想 アジア経済旬報706・7合併号
1~5
- 新島淳良：1967年の中国文化大革命(国内情勢) 同
上 6~14
- 岩村三千夫：文革と中国の外交——67年対外関係の特徴
同上 15~27
- 林中行夫：1年間の北京生活から(1) 同上 28~
30
- 劉少奇の天津資本家への談話 同上 38~44
- 浅井敦：「王国藩合作社」の歴史と現状——建明人民公
社西舗大隊を訪ねて アジア経済旬報708 1~10
- プロレタリア文化大革命の全面的勝利を迎えよう(「人
民日報」「紅旗」「解放軍報」1968年元旦社説)
同上 20~26
- 蔵居良造：文化大革命のバランス・シート——文化大革
命の行くえ 季刊東亜2 77~89
- 江頭数馬：中国文化大革命の底流 共産圏の動き23 1
~23
- 草野文男：毛沢東思想の形成過程とその特徴 共産圏
問題12-1・2合併号 118~135
- 土井章：毛沢東の矛盾論とその政策的展開 同上
136~151
- 桑原寿二：中国の土壌と文化革命 同上 152~177
- 広田洋二：文化革命と中共外交の理論構造 同上
178~216
- 竹内実：混乱と虚無の中から 群像23-1 298~308
- 米沢秀夫：中国の社会主義建設における問題点——経済
面からみた「文化大革命」の前史 経済45 83~
96
- 杉山市平：毛沢東人民闘争の新段階 現代の眼9-1
206~214
- 藤村俊郎：過渡期階級闘争の理論と毛沢東思想 思想
523 114~127
- 新島淳良：毛沢東における弁証法の諸問題 同上
128~141
- 菅沼正久：農村人民公社論 同上 142~155
- 浅井敦：現代中国法の理論 同上 156~166
- 斎藤秋男：中国における教育改革——その展開と問題点
同上 167~178
- 柴田穂：周恩来伝 自由10-1 154~167
- 西村忠郎：文化大革命の行方 自由世界5-1 17~
20
- 渡辺鏡蔵：毛語録と朝日、社会党の隷従 同上 40~
58
- 上川清：中国文化大革命における奪権闘争の問題点
世界革命運動情報8 63~69
- 平野常治：文化革命下の中国見聞記 世界経済評論12
-1 37~40
- 金雄白：彭徳懐事件と文化大革命——総決算をねらう毛
沢東 世界週報49-2 22~34
- 永淵清敏：工業は減産、農業は微増——文化革命下の中
共経済 同上 36~39
- 金雄白：江青と極左勢力の後退——文革派の実権は林・
周へ 世界週報49-4 38~41
- プロレタリア文化大革命の全面的な勝利を迎えよう(人
民日報・紅旗・解放軍報1968年元旦社説) 同上
42~45
- 金雄白：長期化する国際的孤立——文革下の中共外交
世界週報49-5 58~67
- 許広平：我々のよう(痛疽)、それは彼等の宝物 大
安14-1 22~26
- 山村文人：中共の進路——その自信と弱点 大陸問題
192 50~57
- 明治維新・文化大革命・台湾独立 台湾2-1 表紙
裏
- 文革のなかの広州交易会 中央公論83-1 42~43
- 鍾華敏：文化大革命の中の江青——続・江青正伝 同
上 314~331



岩村三千夫：文化革命下の対外関係——1967年の動きについて 中国研究月報239 1~24
 古在由重等（座談会）：中国「文化大革命」と日本の知識人 文化評論76 151~171
 浅井敦：法律家のみた中国文化大革命 法学セミナー74~77
 大塚有章：「毛沢東語録」活学活用の中間報告 毛沢東思想研究3-1 28~32

2 月

村中行夫：人民解放軍の果したのもの——1年間の北京生活から（2） アジア経済旬報709 25~26
 内山鶴：文化大革命と中国演劇界（1~3） アジア経済旬報710 19~22, 711 10~17, 712 9~18
 中国のフルシチョフの対外貿易政策（「人民日報」67.9.1） アジア経済旬報710 23
 村中行夫：大字報の変遷（その1, 2）——1年間の北京生活から（3, 4） アジア経済旬報711 8~9, 713 10~11
 徐訐：中国に市民的自由はあるか 経済往来20-2 129~143
 越村衛一：周恩来は橋頭の草か 同上 144~161
 蔵居良造等（シンポジウム）：中国文化大革命のゆくえ コリア評論83 22~45
 雨宮庸蔵：毛沢東の「聖寿万才」 自由10-2 178~183
 三年目を迎えた中国文化大革命 新聞月報252 65~67
 中共九全大会への胎動 世界267 19~22
 青海省二・三事件関係資料——中国文化大革命特別資料（2） 世界革命運動情報9 60~72
 金雄白：後退した奪権闘争——毛沢東の新戦略的配置 世界週報49-6 36~46
 造反派内部で派閥争い——中共の武闘再び激化 同上 14~16
 金雄白：周恩来の台頭目立つ——軍政両面に隠然たる勢力 世界週報49-8 43~45
 立花丈平：ご破算の五ヵ年計画——文革下の中共工業 同上 46~49
 梁夢廻：京劇《四郎探母》の評価問題 大安14-2 2~5
 新島淳良：武漢事件——文化大革命下の中国紀行（8, 9） 大安14-2 14~20, 14-3 2~8
 草野文男：中共文化大革命傍証（1）——劉少奇思想の

基本性格と特徴 拓殖大学論集59 123~148
 菊池英夫：文化大革命における「文化」問題 中国研究月報240 1~26
 柳田邦夫：中国文化大革命をどう見たか（1, 2） 日本読書新聞1446, 1448
 （討論）：アジアの緊張とキリスト者の責任——中国文化大革命とベトナム戦争をめぐって 福音と世界23-2 13~29
 伊藤敬一：試練に立つ中国の文学 文学界22-2 197~200
 橋本貢：中国「文化大革命」とトロツキストたち 文化評論77 48~59
 堀井善太：中国プロレタリア文化大革命と背教者宮本一派——「赤旗」10・10論文批判（1, 2） 毛沢東思想研究3-2 42~54, 3-3 39~49

3 月

岩村三千夫：「文革」の勝利と幹部問題 アジア経済旬報713 1~9
 時枝俊枝：映画「夜明けの国」の制作から——日中両国人民の相互理解を焦点に アジア経済旬報714 1~6
 新島淳良：「文芸十条」「文芸八条」について 同上 7~8
 《文芸十条》当面の文学芸術工作についての意見（修正草案） 同上 9~26
 柴田穂訳・解説：中国文化大革命中央指示通達集 経済評論17-3 145~224
 柴田穂：公式文書に見る文化大革命の特徴と今後 同上 225~235
 野村浩一：毛沢東思想の形成と特質——とくに大衆路線の思想について（上） 思想525 1~18
 梅本克巳：思想の言葉 同上 100~101
 豊田四郎：周恩来発言の真の「意味」 世界269 270~273
 立花丈平：文化大革命と軍の動向——国防を犠牲に奪権を支援 世界週報49-11 38~41
 黄震遐等（座談会）：九全大会開催に全努力——文革収拾を急ぐ主流派 同上 42~46
 山田繁：中共軍と文化大革命 大陸問題194 30~36
 内山敏：今年の毛沢東——マックファークアの予想 中国52 76~78
 浅井敦：文化大革命と憲法問題 中国研究月報241 1~25

を訪れて
 止と革命
 武漢事件
 出た林彪
 転換
 内部分裂
 世界週
 不満広が
 それと
 文献
 58
 の中国紀
 共報道を
 234 1
 から1967
 ー8
 言 同
 七大革命
 と世界22
 芸術
 65~73
 な攻撃に
 同上
 『燕山夜
 2』



資料

中国ソヴェト関係資料

江西全省「ソヴェト」政府ニ
関スル周乗竜ノ調査復命書

(『中南支地方共産党及ヒ共産匪行動状況ニ関スル調査報告書』所収)

〔昭和5年〕9月8日午後8時南陽丸ニテ漢口出発。翌9日午前4時頃湖北省荊州附近通過ノ際、陸上ノ共匪ヨリ射撃セラレタルモ、無事9日午前9時九江ニ到着。直ニ領事館ニ至リ、志波署長及梅谷書記生ニ面会シ、打合ヲ為シタル後、同日午後2時南潯鉄道ニテ南昌ニ向ヘリ。途中黄老門、馬廻嶺両駅ヲ通過セル処、停車場及附近民屋ノ約半数ハ、共匪ノ為ニ焚焼セラレタルヲ見受ケタルカ、右ハ去ル8月中共匪ノ掠奪ニ遭ヒ、未タ修復セラレサルモノナリト云フ。

8時南昌停車場ニ著セルカ、軍隊ハ車上ニ至リテ一々旅客ヲ検査訊問シ、下車ノ際ハ更ニ督察処ニ於テ検査セラレ、停車場ヲ出テテ河岸ニ至リシ時、又々警察ノ検査アリ。渡船ニ依リ対岸南昌ニ上陸ノ際、更ニ軍隊ノ検査ヲ受ケ、旅館ニ至ッテ宿泊セントセルニ、何レモ保証人3人ヲ要ストノ事ナリシ故、保証人ヲ探シタルモ見当ラス。9時以後ハ特別戒厳ニテ、行人ノ通行ヲ禁止スル趣ナリシカハ、已ムヲ得ス楊子廠街口ノ文明酒樓ニ至リテ約二元ノ夕食ヲ喫シ、同処使用人ニ酒錢一元ヲ与ヘテ、事情ヲ話シテ切一一夜ノ宿ヲ借サムコトヲ懇願シ、漸クニシテ宿泊場所ヲ覓メ得タリ。翌10日6時、該所ボーイニ促サレテ同所ヲ立ち出テ、9時南昌市政府ニ旧友周維東ヲ訪問シ(前漢口煙酒稅局員ニシテ現在市政府収發処員)タル処、周ハ人ヲ派シテ大裴家巷第28号ナル彼ノ住所ニ案内シクレタルカ、更ニ旧友周維新(元漢口捲烟稅局員ニシテ現ニ陸軍第五師新兵募集分処募集員)ニ面会シ、昼食後周ト共ニ江西省政府ニ賈伯濤(前湖北省党部整理委員)ヲ訪問シタル処、面会スルヲ得サリキ。聞ク処ニ依レハ、第十八師政治訓練所ハ取消サレ、友人タル簡僕張俊夫等ハ皆討逆宣傳第二大隊中ニアリテ活動シ居リ、未タ江西省ニ来リ居ラサル趣ナリ。午後2時、周ト共ニ旧兵營(南昌ヲ去ル10里ノ鄉村中ニアリ)第五師司令部新兵募集処ニ、邱副官黃副官萊副官等ヲ往訪シ、新兵募集分処事務員ニ採用セラレ、下午5時南昌ニ帰来セル処、周維新ノ弟周志安(現任省政府秘書書記)ハ帰宅シ、義勇縣太平郷ニ共匪6、7千人進撃シ来リ、南昌ニ進攻シ来ル氣勢ヲ示シ居レルヲ以テ、十八師ノ警備第二

團ハ2個大隊ノ兵ヲ派遣シ、討伐ニ向ハシメタル処、南昌ニハ守備手薄ナル為、人心競々タルモノアリ。南昌ニハ城壁ナキ為メ、東南北ノ3面ハ鉄条網ヲ張り、西方ハ河ニ沿ヒテ要塞ヲ築キ居リ、防備極メテ鞏固ナル趣語リタリ。午後6時ニ及ヒテ、周維東モ亦市政府ヨリ帰宅シ来リ、共ニ江西全省共匪ノ情况ヲ談シタルカ、第九路總指揮魯滌平ハ湖南湖北兩省ト連合シ、誓ッテ共匪ヲ勦滅シ、地方ヲ安ンセントシ居ル趣ナリ。

11日午前6時、周維新及兵士1名ト共ニ、一輪車ニ乘リテ太平郷ニ至リ、其ノ地方情况カ新兵募集ニ支障アルヤ否ヲ視察ニ向ヘルカ、午後2時太平郷ニ至リシ際ハ、共匪ハ既ニ新県方面ニ退却シ終リタル後ナリキ。共匪ハ9日夜安義縣方面ヨリ太平郷ニ至リ発砲進入セルカ、大小商店ハ何レモ提灯ヲ懸ケテ歓迎ノ意ヲ表示シタルカ、10日午前8時頃遂ニ奪掠ヲ開始シ、現銀銅錢ハ全部奪ヒ去リ、油塩衣服ノ類ハ街路上ニ散布シ、貧民ノ勝手ニ奪ヒ去ルニ委ネタリ。因ニ共匪カ太平郷ヲ襲撃セル原因ハ、該処民団軍団長顧某ナルモノカ、曩ニ共匪20余名ヲ逮捕シ、江西省ニ送致処罰セル事アリ、之カ報復ノ為メナル由ニシテ、顧ハ既ニ逃走シタル後ナリシカ、其ノ家屋ハ焼毀セラレ、外ニ一警察派出所モ共匪ノ為メニ襲撃セラレ、守望隊10名ハ匪賊ノ為ニ倒サレ、小銃3挺ヲ奪ヒ去ラレタリ。市街家屋ノ牆壁ニハ、「實行土地革命」「農工ハ團結スヘシ」等各種ノ反動標語ヲ白墨ヲ以テ大書シ、人民ニ対シテハ、各戸ハ必ス赤旗ヲ作成準備シ、次回太平郷襲撃ノ際ハ必ス赤旗ヲ掲ケテ歓迎スヘク、若シ赤旗無キモノハ、反動分子ト見做シ全部斬殺シ、其ノ家ハ焚焼スヘキ旨演説セル趣ニシテ、地方人民ハ頗ル恐怖シ居レルカ、焼カレタル家屋ハ警察所及附近民屋5棟ニシテ損害大ナラス。共匪ノ所持セル銃器モ多カラサリシ由ナリ。

11日午後4時、周維新ハ募集セル新兵32名ヲ引卒シ、南昌ニ向ヒテ帰還シ、夜1時南昌城外鄉村ノ旧兵營新兵募集処ニ到着、1泊セリ。

12日午前8時南潯鉄道ニテ樟樹ニ至ラントシ、12時豊城停車場ニ到着セル処、豊城樟樹間ノ電線カ11日夜共匪

ノ為ニ切断セラレタル為、豊城ノ戒嚴ハ頗ル嚴重ニシテ前進スルヲ得サリシヲ以テ、已ムヲ得ス南昌ニ引返セリ。

13日午前12時南昌ヨリ渡河シ、午後2時南潯鉄道列車ニテ九江ニ向ヒ、午後8時九江ニ到リ志波署長ニ報告ヲ終リ、蓬萊旅舎内ニ宿泊ス。

14日、本旅行ニ於テ聞知セル各種消息ヲ総括シ、報告書ヲ作成セリ。

以上ハ本旅行ノ経過情形ナリ。

(周乘竜報告訳文)

南昌市政府友人ノ語ル処ニ依レハ、南昌市公安局ニ於テハ、曩ニ密偵4名ヲ吉安県ニ派遣セル処、共産党ノ為ニ捕ヘラレ、3名ハ殺サレタルモ、内1名ハ逃レテ帰り来リタルカ、同人ノ報告ハ大要左ノ如クナリシ由。

吉安城内ハ尚平穏ナルモ、多数ノ女子共産黨員ハ、避難民ノ風ヲ装ヒ軍事状況ノ偵察ニ当リ居リ。東固ニハ農民自衛軍2万余人アルモ、銃器甚タ少ク、所持セルハ多ク棍棒、刀矛、農具等ノ類ナリ。又学生軍1千2百名アリ、各人拳銃及青竜刀ヲ所持シ、隊名番号及犠牲奮闘等各種ノ文字ヲ記セル赤旗ヲ刀ノ柄ニ結ヒ附ケ居レルカ、尚別ニ守望隊(歩哨隊)ナルモノアリ、各要路並ニ山頂ニ之ヲ配置シ居ルモ、何レモ農民ヲ以テ之ニ充当シ、専ラ政府軍ノ行動探望ニ当リ居レリ。紅軍内部ノ組織連絡ハ甚タ厳密ニシテ、各種情報ノ伝ハルコト極メテ速ナリ。軍人ハ死ヲ恟レス、金銭ヲ愛セス、貧民ヲ遇スルコト最モ厚ク、從テ一般貧民モ又極力紅軍ノ擁護ニ努メ居レリ。之政府軍カ紅軍討伐ノ困難ナル所以ナリ。

○東固ニハ紅軍訓練所ヲ開設シ居リ、各地共産党部或ハ「ソヴィエト」政府ノ保証アルモノヲ入所セシメ、1ヶ月ヲ以テ卒業シ、卒業後ハ自己ノ金銭ヲ以テ拳銃1挺及大刀1本ヲ購入シ、紅軍大学軍事科ニ入学シ、6ヶ月ヲ以テ卒業シ、各軍ニ編入セラレ、幹部指揮官トナルモノナルカ、若シ訓練所学生ニシテ、金銭ヲ所持セス自カラ拳銃、大刀ヲ購入スルコト能ハサルモノハ、紅軍大学ノ政治科ニ入学シ、4ヶ月ニシテ卒業シ卒業後ハ各地ニ分派セラレテ危険ナル工作ニ従事スルモノナルカ、成績良好功勞顯著ナルモノハ、各軍ノ政治委員ニ任命セラルルモノナリ。

紅軍大学ハ民国17年2月ヨリ19年(本年)3月迄継続セラレ、軍事科卒業生1千余人、政治科卒業生6百人ニ達シ、外ニ3ヶ月ヲ以テ卒業ノ党務科卒業生ヲ合シ、3千余人ノ卒業生ヲ出セルカ、現ニ之ヲ閉鎖シ、之ニ代ユルニ從軍学校ヲ興シ、各軍団別個ニ開設スルコトトセリ。

東固ニハ紅軍倉庫ノ設置アリ。之ヲ分チテ「紅軍糧台管理処」並ニ「平民借貸經理処」トナシ、人民及政府軍ヨリ掠奪セシ米穀ヲ貯蔵スルモノニシテ、米ハ紅軍ノ食糧トシ、粟其他ノ雜穀ハ黨員中ノ貧民ニ給与スルモノナルカ、紅軍中ノ保証人ノ紹介アルカ、又ハ自己ノ居住家屋ヲ紅色ノ壁トナシ、共産党ノ番号ヲ記入セルモノニ非サレハ、穀物ノ貸与ヲ受クルヲ得ス。

○東固ニハ平民銀行ノ設ケアリ。「儲蓄」「保管」「発行」ノ各部ニ分レ、凡ソ人民ニシテ5千元ノ不動産アリ、尚共産党ニ加入シテ其ノ保護ヲ受ケムコトヲ欲スルモノハ、其ノ田契ヲ保管部ニ送リテ保存方ヲ願出ツヘク、現金所有者ハ多少ニ拘ラス之ヲ儲蓄部ニ送付シ、財産ノ安全ヲ図リ得ルモノトス。

同銀行ハ銀元ノ紙幣ヲ発行シ、10元、5元、1元ノ3種アルモ、何レモ、上海等各地大銀行紙幣ヲ偽造行使シ居ルモノナリ。外ニ江西銅貨10枚ノ銅錢紙幣ヲ発行シ、何レモ一般人民ニ使用ヲ強制シ居レリ。但シ紅軍人員自身ハ何レモ現銀ヲ使用シ居レルカ、右ハ各地ニ人ヲ派シテ、其ノ発行セル偽造紙幣ヲ兌換売却シテ、現銀ニ交換セシメタルモノニシテ、百元ヲ交換セルモノニハ20元ノ賞金ヲ与ヘ居レル由ナリ。

東固ニハ印刷工場ノ設置アリ。何レモ普通ノ活字活版ニシテ、共産党書籍伝單等ヲ印刷ス。工人約2百人アリ。工賃ハ3等級ニ分レ、毎月6元、5元、3元トシ食事ハ工場負担トス。

○東固ニ彈丸製造所アリ。「ソヴィエト」人技師2名監督1名ヲ聘シ、外ニ多数ノ朝鮮人及広東人技手アリテ、専ラ銃砲ノ修理、彈丸ノ製造ヲナシ、職工數約30名ナリト云フ。因ニ同製作所ニ於テハ小銃及ヒ拳銃ノ製造ヲ為シ得ルモ、技術精巧ヲ欠ク。又附属鉄工場アリ。鉄工數10人アリ。刀矛等一切ノ工兵使用器具ヲ製造ス。

○「中央紅光日報」ト称スル新聞ヲ発行シ、毎日1枚ニシテ党務軍情兩欄ニ分レ、其ノ他、3日目毎ニ1回発行スル「江西日光報」ト称スル小新聞、並ニ月刊「海光報」等ノ宣伝物ヲ刊行ス。

○東固ニアル長江(江西、湖南、湖北)区政治委員会ハ分チテ「指導」「宣伝」「裁判」ノ3部ニ分レ、委員ハ李立三、向忠發、劉昌群ノ3名ノ外、工人1名農民1名計5人トス。

○長江区軍事委員会ハ、分レテ「參謀」「工農武装」「通報」ノ3部トナリ、委員ハ毛沢東、朱德、葉挺、賀竜、彭德懷、王佐、袁文才ノ7名ナリ。

○江西全省共産党紅軍勢力
江西全省各県各市ハ1処トシテ共産党部ノ在ラサル処ナク、全省尽ク完全ニ赤化区域ナリト称スモ過言ナラ

策につい

22

員との懇

〜6

上 7

迎える

同上

87 7

一つの感

9〜22

通信

9 1〜

大革命か

114〜

丸山昇

面 資

と問題点

を中心と

6〜18

る 世

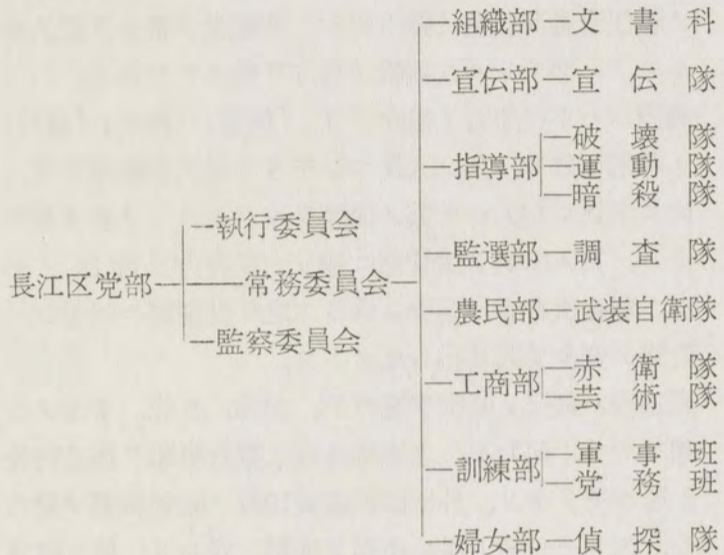
宮秘史》

産問題

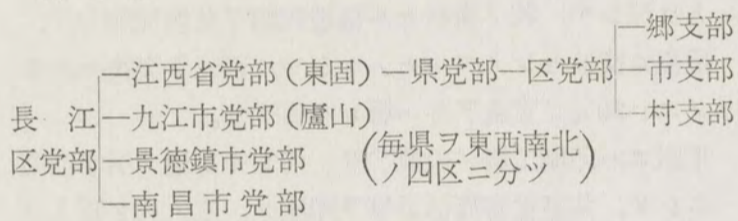
産問題

ス。
 ○今、「スターリン」ノ指揮ヲ受ケ居ル第三国際直屬支部タル共産党党部組織狀況ヲ表示スレハ左ノ如シ。

第 1 表



第 2 表



▷ 党员 3 名アレハ支部ヲ設置スルヲ得、10 名アレハ区部、12 人以上ハ県部ヲ設置スルヲ得。

▷ 市党部ノ下ニハ区部無ク単ニ支部アルノミ。

農民協會 }
 婦女協會 } ハ省市又ハ県党部ニ直屬シ、其ノ指揮ヲ
 青年團 } 受ク。
 奮勇團 }

共産党ノ最モ注意ヲ集中セルハ農民問題ニシテ、極力江西全省貧農ヲ完全ニ團結シ、武装自衛ヲ成立セシメ、以テ党ノ發展ヲ図ラントシ、凡ソ紅軍ノ到ル処先ツ農民ノ共産党加入ヲ勸誘シ、肯セサレハ武力圧迫ヲ加ヘ、一度共産党ニ加入セルモノハ直ニ之ヲ農民赤衛隊ニ編入シ(農民政策)、田地均分ヲ以テ農民欺瞞ノ具ト為ス(土地革命)。

現在、江西省農民ニシテ共産党员トナレルモノ既ニ 70 万人、圧迫ヲ加ヘラレテ已ムヲ得ス加入シ居ルモノ 40 万人、総計 1 百万人以上ノ党员ヲ有スル処、共産党ハ尚ホ到ル処宣伝ニ努メ、一面掠奪焼燬ヲ逞シクシ、富家ヲ変シテ貧家トナシ、1 年後ニハ、江西全省農民ヲ全部共産党ニ加入セシメト計画シツツアリ。

○ 共産党ノ土地分配計画ハ、全省土地ヲ 4 等ニ分チ、一等ハ官有地トナシ中央ニ屬ス。

共産党々員ハ、何レモ每人 3 畝 3 分ヲ受領耕作スルヲ得、1 年ニ税金 24 元ヲ納付スヘキモノトス。

二等ハ官有地ニシテ省有トス。

省共産党々員ハ毎 1 人 3 畝 3 分ヲ耕作スルコトヲ得ヘク、1 年 20 元ヲ政府ニ納付スヘキモノトス。

三等ハ官有地ニシテ県有トス。

県共産党々員ハ、毎 1 人 3 畝 3 分ヲ耕作シ、1 年ニ 16 元ノ税金ヲ納付スルモノトス。

四等ハ官有地ニシテ郷有トス。

何人ニ論ナク 3 畝 3 分ヲ受領スルコトヲ得ルモ、1 年ニ税金 48 元ヲ納付スヘク、紅軍兵士又ハ党员ハ税金ノ一半ヲ減額シ、24 元ノ納付ヲ為スモノトス。

以上ノ如ク、江西省ノ田地ハ凡テ「ソヴィエト」政府ニ於テ一旦之ヲ没収シ、後之ヲ分配スルモノトス。

○ 江西省「ソヴィエト」政府— 県政府—
 (省政府委員 5 名) 委員 3 名

— 区政府— 市政府— 郷政府—
 委員 1 名 委員 1 名 委員 1 名

○ 紅軍狀況

第四軍団司令朱德

所屬部隊約 7 万人アリ。大半湖南ニ出征游撃中ナルモ、尚 2 万人残留シ、銃器約 9 千ヲ有シ、安義、太平郷、宜豊、靖安、奉新等各県ヲ占拠ス。

第七軍団司令毛沢東

所屬部隊ノ多クハ湖南ニ赴ケルモ、尚 1 万余人、銃器 3,4 千ヲ有シ、高安、上高、万載、銅鼓各地ニ在リ。吉安東固ニ在ル部隊モ亦朱、毛軍ニシテ、留守後方守備隊トシテ特種ノ任務ヲ有シ、約 1 万余人アリ、銃器モ亦完備ス。

其ノ他

星子県、紅軍茫光ノ部隊約 2 千人アリ。小銃 7 百ヲ有ス。

靖安県、紅軍団長余国珍部隊(第四軍)約 3 千余人アリ。小銃千 2,3 百挺並ニ拳銃若干ヲ所持ス。

景德鎮附近、紅軍徐維東部隊約 2 千人アリ、6 百余挺ノ小銃ヲ有ス。

鄱陽県、(方志敏ノ部隊)

弋陽県、周貫鴻(方志敏部)

樂平県、邵式平(方志敏部)

独立第一軍団司令方志敏(現在湖口ニアリ)

所屬部隊 4 万余人、小銃 1 万余挺アリ。

上饒、興安、弋陽、鉛山、樂平、鄱陽、湖口一帯ニ分駐ス。

吉安東固ニハ第二十軍団司令李雲秀アリ。所屬部隊約 2 万余人、後方留守及吉安攻略ニ従軍シ、最近梅塘、代家瀾ニ浮橋ヲ架設シ、渡江ノ上吉安攻略方準備中ナリ。

固江ニハ第二十軍独立団長呂德賢所屬部隊 1 千余人、

中国現代史

第一

1919

初期

漢訳

李大

中国現代史

1929

第二

国民

国民

国民

中訳

辛亥

附

辛亥

1935

全国

中国現代

国民

「七

国民

重訂

郭沫

茅盾

抗戰

華中

華中

外国

現ニ吉安ニ向ッテ猛烈ナル攻撃ヲ加ヘツツアリ。
修水，武寧，現ニ彭德懷部隊1千余人アリ。

周秉竜報告書

共産党ハ婦女子ヲ利用シテ探偵ト為シ，軍隊ノ共産化運動ヲ行ハンカ為ニ婦女開放運動ニ著手シ，結婚ノ絶対的自由ヲ規定シ，女子ニ対スル一切ノ束縛ヲ解除セリ。為ニ旧来ノ礼教廉恥ハ完全ニ消滅シ，男女ハ平等ニシテ，凡テ男子カ為シ得ル事ハ女子モ亦当然之ヲ為スヲ得ルモノトス。聞ク処ニ依レハ，男女ノ婚姻ハ6個月ヲ以テ1期トシ，期限経過後ハ，男女双方同意ノ上更ニ6ヶ月ヲ継続スルコトヲ得ルモ，若シ男女ノ一方ニ異議アル場合ハ直ニ離婚シ，他ニ配偶ヲ選択スルノ自由ヲ有ス。若シ離婚ノ際儿女アリ，父母何レモ其ノ子ヲ欲シテ解決セサル時，又ハ双方共之ヲ不要ナリトスル際ハ，裁判所ニ送り，幼稚園（小児養育所）ニ引取ラシムルモ，父母ノ妥協ニ依リ分配シ得ル際ハ，男女双方ニ於テ自由ニ処理シ得ルモノトス。尤モ共産党ニハ別ニ一種ノ規定アリ。凡ソ児童ニシテ父母ノ教養シ能ハサルモノハ，政府代ッテ教養ノ任ニ当ルモノトス。

婦女子モ兵隊トナリ，国家ノ為ニ犠牲トナリ，革命ニ従事スルコトヲ要求セラレ，現ニ，東固方面ニハ武装セル女子共産党甚タ多く，又婦女子ノ各地ニ分派セラレテ密偵トナリ，宣伝ニ従事スルモノ最モ多く，現ニ南昌監獄中ノ女子共産党員30余名アリ。既ニ法院ニ於テ有罪ノ判決ヲ受ケタリト云フ。

江西共産党ハ，土豪劣紳ハ直ニ之ヲ殺戮スルモ，農工二者ニ対シテハ極力之ヲ保護スルノ政策ヲ採リ居ル為其ノ反面，無辜ノ農民ニシテ，政府軍ノ為ニ無実ノ罪ヲ負セラレ射殺セラレシモノ亦甚タ多く，従テ，農民ニシテ一度共産党ニ加入セルモノハ直ニ其ノ家庭ヲ破壊セラレ，勢ヒ共産党ニ忠勤ヲ励ムコトトナル。之，政府軍カ共産党ノ討伐殺戮ヲ行ヘハ行フ程，却ッテ反対ニ，紅軍数ハ愈々増加スルノ奇現象ヲ呈シツツアル一大原因ナリ。

従来，共産党逮捕後ハ之ヲ法院ニ送ッテ審理セシメタル処，江西省ニ於テハ，共産党ノ処分ヲ迅速ナラシムル見地ヨリ，共匪逮捕後ハ軍事機関ニ於テ直接之ヲ処決シ，軍隊ナキ地方ニ於テハ，県政府ニ於テ全権ヲ以テ処決スルノ権能アリ，上級軍事機関ニハ単ニ報告ヲ為スヲ以テ足ルコトトナリ居レリ。従テ若シ共産党員ニシテ一度逮捕セラレンカ，死ヲ免カルルコト絶対ニ不可能ナリ。

○共産党カ逮捕セル政府役人，土豪劣紳，貪官汚吏等ハ一般民衆ノ多く集合スル地点ヲ選ヒテ之ヲ斬殺シ，死体

ヲ収容スルコトヲ厳禁シ，之ヲ露天ニ抛棄シテ人民ニ見セシムルモノナルカ，5千元以上ノ不動産ヲ有スルモノヲ土豪トシ，貧民ヲ圧迫シテ貧民ヨリ告発セラレタルモノヲ劣紳トナシ，囚人ヲ虐待シ，共産運動ニ反対シ，黨員ヲ逮捕セルモノヲ貪官汚吏トナスモノナルカ故ニ，其ノ範圍甚タ広く，殺人又従ッテ多キ所以ナリ。

○貧民カ富者ヨリ借用セル借金ハ，其ノ百分ノ3ノ現金ヲ当該地方「ソヴェト」政府ニ納付シテ，之カ取消ヲ請求スルコトヲ得。政府ハ右債務ノ消滅ヲ布告シ，永久ニ償還ノ必要ナキコトトナル。又若シ富者ニシテ貧民ニ対スル債権証書又ハ抵当品証憑等ヲ自動的ニ「ソヴェト」政府ニ提出シ，該債権ノ償還ヲ要セサルコトヲ申出スルモノニ対シテハ，政府ハ百分ノ3ノ賞金ヲ債権者ニ給与ス。但シ右金額ハ債務者ヲシテ交付セシメ，以テ債務ノ返済トナス。

○紅軍ハ，到ル処必ス官署及資本家ノ邸宅ヲ完全ニ焼毀シテ決シテ假借セス。紅軍ハ，其ノ占領セル地方ニシテ若シ官軍ノ勢力カ増大スルトキハ，自カラ退却シ，官軍兵力微弱ナルトキハ之ト交戦シ，其ノ銃器ヲ奪ハントスルモノニシテ，全然一種ノ移動匪賊ノ行動ヲナス。又紅軍ハ其ノ到ル処ニ於テ，一面強迫ヲ行フト同時ニ，一面好言ヲ以テ人民ノ共産軍加入ヲ勧誘シ，先ツ土豪劣紳ヲ指摘シテ殺人放火ヲナシ，人民ヲ恐怖セシメ，他面富者ノ米穀，油，塩，衣服等ヲ貧民ニ分与シ，以テ人民ノ好感ヲ買フニ努メ，其ノ軍規モ極メテ嚴重ニシテ絶対ニ貧民ヲ殺スコトナク，長官ノ命令ヲ俟チテ始メテ殺人放火ヲナスモノナル由ナリ。

又紅軍内部ニハ暗殺隊ノ編成アリ，専ラ軍政界要人及反共産主義者ノ暗殺ニ当リ，又放火隊ナルモノアリ，専ラ家屋ノ放火烧毀ニ当リ，運動隊ナルモノアリ，軍隊警察ト策謀シテ反乱ヲ行サシム。

尚聞ク処ニ依レハ，共産党員ハ江西省ニ於テ盛ニ新兵ヲ募集シ居ルニ乗シ，特ニ黨員ヲ派シ貧民ニ変装シ各軍中ニ於テ新兵トナリ居ル由ナリ。

江西省ハ各地ニ共産党員潜伏シ居ルヲ以テ，消息ノ伝ハルコト甚タ速カニシテ，凡ソ軍隊少キカ，又ハ軍隊ノ駐屯ナキ地方アレハ，共産党ハ急ニ該処ニ現ハレテ暴動ヲ為シ，財物ノ掠奪ヲ行フモ，軍隊ノ討伐ニ向フモノアレハ直ニ逃走スルモノトス。

○以上ハ何レモ，第五師カ各県ニ於テ募集セル新兵ノ南昌ニ来レルモノノ談ニシテ，東固方面ノ実地視察ハ時間ノ都合上不可能ナル為其ノ儘引キ返セリ。

○其ノ他紅軍ト第三国際トノ関係ハ不明ナルモ，聞ク処ニ依レハ，朱德，毛沢東，彭德懷等ハ第三国際支部書記「スターリン」ノ指揮ヲ受ケ居ル由ニテ，「スターリン」ハ70万ノ農民軍組織ヲ朱德ニ命令セル趣ナリ。

11
1949年
国研
に分
部に
どの
物を
た巻
究機
代中
前号
探す
と
特に
所編
る。
史料
を摘
77
97
103
110
115
133
139
183
219
147
275
297
301
316



○消費組合ノ組織等ニ関シテハ何等聞ク処ナカリキ。
右報告ス。

(『中南支地方共産党及ヒ共産匪行動状況ニ関スル
調査報告書』 昭和5年12月刊, 401~409頁)

福建省竜巖ニ於ケル閩西「ソヴェエト」 政府ニ関スル江文祉ノ調査復命書(同前)

閩西共産党ノ状況及最近ニ於ケル彼等ノ行動ヲ实地調査
ノ為メ、適中ニ出張シ調査シタル処、左記ノ通りニ付キ
右報告ス。

- (1) 閩西共産党ノ旗ハ、紅色地ニ中央白色ニテ花模様
ノ如キモノ、即チ「斧刀」「鎌刀」ノ模様ヲ入レ作
成シタルモノニシテ、大概工農労働ノ意義ヲ表示ス
ルモノナリ。
- (2) 閩西蘇維埃ノ偽政府ノ最高機関ノ所在ハ、竜巖県
公園ノ裏手ニシテ、紅軍々官学校ハ竜巖中学校ニ設
立シアリ。已ニ2班ノ紅軍卒業生ヲ出シタリ。
- (3) 閩西蘇維埃偽政府ノ主席ハ鄧子恢、竜巖人ニシテ
元竜巖中学生ナリ。
- (4) 閩西蘇維埃ノ偽政府ノ組織方法ハ、概ネ軍政各機
関ハ何レモ委員制ニシテ、各部各会ハ悉ク委員ノ議
案ヲ以テ行事ヲ決スルモノトス。
- (5) 閩西蘇維埃ノ偽政府ニ於ケル重要人物ハ、(1)鄧子
恢、(2)阮山、(3)盧肇西、(4)蘇月華、(5)鄧毅剛、(6)張
鼎丞、(7)傅伯翠(上杭県)、(8)盧其中、(9)陳正、(10)江
桂華、(11)鄧益、(12)黄公略、(13)張双鳴(竜巖)、(14)張梅
生(連城)、(15)李任予、(16)謝国勳。
- (6) 蘇維埃偽政府ノ各機関ノ名称ヲ分類スルニ、(1)軍
政部……軍事委員及軍官列席ノ上会議ノ権ヲ有ス。
(2)政治部……政治委員及各県偽主席列席ノ上会議ノ
権ヲ有ス。(3)財政部……直接閩西ニ於ケル各県ノ会
計ヲ以テ事ニ当ラシム。(4)婦女部……閩西ニ於ケル
各県区ノ婦女ヲ召集シ、同婦女等ヲシテ紅軍ノ信迎
ニ参加セシメ、且ツ直接婦女ノ裁判及ヒ取締権ヲ有
ス。(5)宣伝部……多数ノ青年学生ヲ集メ、専ラ工作
ノ宣伝ニ当ラシム。(6)土地局……同局委員ハ専ラ土
地ノ没収及配分並ニ裁判ノ全権ヲ有ス。
- (7) 閩西ハ、「朱徳」「毛沢東」カ同所ニ到省以来2軍
ニ編成シタルモノニシテ、即チ第二十軍軍長張鼎
丞、第二十一軍軍長胡少海ナルモ、本年〔昭和5年〕
旧6月12日永福ニ於テ民団長詹方珍ノ為メニ殺害サ
レ、現ニ第二十一軍軍長ハ鄧毅剛カ其ノ後任トシテ
補セラレタリ。
- (8) 紅軍ノ編成方法トシテハ、30人毎ニ1個小隊トナ
シ、3個小隊ヲ1個大隊トナス。3個大隊ヲ1個中
隊トナシ、3個中隊ヲ1縦隊トス。3縦隊ヲ以テ1

軍トス。

- (9) 閩西共産区ハ、各県各区各郷村ニハ何レモ蘇維埃
ノ政府ヲ設置シアリ、各所ニ主席1人、土地委員数
人、裁判員1人、会計員1人配置シアリ。
- (10) 閩西偽政府ノ教育制ニ関シテハ、竜巖ニ最高教育
ヲ設ケ紅軍ノ人材ヲ養成シツツアリ。其他各県各郷
村社ニハ悉ク「列寧学校」ヲ設置シ、主トシテ「マ
ルクス」ノ経済学説及「恋愛自由」、並ニ偽政府新
編ノ書歌ニ関スル教授ヲナシツツアリ。
- (11) 右教育費ニ関シテハ、偽政府ニ於テ同地方ノ森林
ヲ没収シ、教育費ニ当テシメツツアリ。
- (12) 右没収シタル土地ハ、土地委員ニ於テ各工農ニ1
人平均2石5斗分配ノ上耕作セシメ、右以上耕作セ
ントスルニハ、偽政府ニ申請シ、予メ2割ノ耕作料
ヲ前納スルコト。
- (13) 偽政府管轄内ニ於ケル男女ノ婚姻ハ絶対自由ニシ
テ、從テ恋愛及離婚モ自由ナリ。
- (14) 偽政府ノ金融機関状況ニ就テハ、銀行錢莊等ノ如
キ名称ナキモ、単ニ「合作社」アリ。同性質ハ普通
ノ公司組織ト略同一ニシテ、偽政府ト商民合作ニテ
経営シタルモノナリ。右合作社ヨリ工農ニ於テ農具
其他耕牛ノ如キモノヲ購入センニハ、3人ノ連帯保
証人ヲ以テ50元以内ヲ前借スル事ヲ得。
- (15) 偽政府区域内ニハ公共病院等ナク、只軍政機関ニ
赤十字医官アリテ、「西」「漢」共ニ医療ニ従事ス。
- (16) 共匪区域内ノ日常生活ハ極メテ簡単ニシテ、社会
ノ経済状態ハ目下正ニ破産シツツアリ。物価ノ如キ
ハ非常ニ下落シ(数倍下落)タルモ、工賃ハ昔ニ比
シ約10分ノ6騰貴シテ居ルト。
- (17) 共匪ノ区域内ニ最モ欠乏ノモノハ塩、米ノ二ツナ
リ。其ノ原因ハ、同区域内ニハ山多ク、田地ハ極メ
テ少数ニシテ、殊ニ周囲ハ何レモ交通杜絶ノ状態ニ
シテ塩ノ運来ハ極メテ困難ナリト。
- (18) 共匪偽政府ノ官員ハ、該区域内ノ人民カ代表ヲ派
シ選挙シタルモノナリ。即チ村、郷、区、県ノ区別
ニ依リ選挙ス。
- (19) 閩西ニ於ケル婦女ノ権限ハ、何レモ選挙権並ニ参
政権ヲ有ス。
- (20) 閩西偽政府ニ於テハ、団兵募集制度ニ就テハ、(1)

次に
それに
定期刊
を掲げ

がある
海外

がある
中国
で出

以上の
大学
会図
また
ただ
なる
東洋
三者
日本
録。
中

少年先鋒隊ハ15歳ヨリ25歳ニ至ル、(2)25歳ヨリ35歳ハ赤衛隊又ハ游撃隊、(3)35歳ヨリ45歳ハ暴動隊。

- ㉑ 共匪区域内ニ於テハ交通隊ヲ最も重要視シ、其ノ任務ハ、昼夜間ヲ問ハス事件発生ノ場合ハ甲郷ヨリ乙郷へ、乙郷ヨリ丙郷へ通信ヲナス。
- ㉒ 閩西婦女ノ組織ニ就テハ、「慰勞隊」「宣伝隊」「運輸隊」「交通隊」アリ。然ルニ婦女中別ニ著名ナモノナク、単ニ各郷村ニ婦女部設置シタルノミナリ。
- ㉓ 共匪ノ要人分駐ノ地点、(1)永定湖雷県蘇維埃主席阮山、(2)竜巖ノ主席ハ張双鳴、(3)上杭ノ主席ハ傅伯翠、(4)長汀ノ主席ハ張人男、(5)連城ノ主席ハ張梅生ナリ。而シテ二十軍々長ハ張鼎丞ニシテ、目下同本部ハ永定ニ駐屯シ、二十一軍々長ハ鄧毅剛ニシテ、本部ハ竜巖ニ駐屯シタリ。
- ㉔ 共匪軍ニハ弾薬欠乏シタル為メ、俗ニ「鳥槍薬」

及「硝磺土製ノ弾薬」ヲ使用シタリ。迫撃砲2門、大砲5門、機関銃1台アリタルモ、何レモ弾薬ナシ。

- ㉕ 巖、永、華、平、靖ノ5県民団ハ、約3千6,7百位ノ兵力ヲ以テ組織シ、下記5委員ノ指揮ノ下ニ活動ス。即チ5委員トハ呂敬齋、郭醒民、林介人、謝仰禹、陳子康ニシテ、何レモ薩鎮冰ノ総指揮ヲ受ケ海軍司令林国慶ヨリ弾薬ノ援助ヲ受ケツツアリ。
- ㉖ 厦門思明監獄ヲ破獄シタル共産党犯謝仰堂及厦門大学生張漢宗、張耕疇等ハ、脱獄後竜巖方面ニ逃走シ、目下謝仰堂ハ鄧子恢ノ秘書長ニ就職シタリ(右ノ事ハ極秘ニシテ、適中方面ニ於テモ知ルモノナシ。只前記謝ノ同学タル林耀堂ノ密告ニ依ル)。(『中南支地方共産党及ヒ共産匪行動状況ニ関スル調査報告書』昭和5年12月刊、411~413頁。)

湖北、河南、安徽境界附近の ソヴェート情況

X Y Z

(『上海週報』817号所収)

本文は中国の某左翼雑誌にサヴェート区域よりの通信として掲載されたものの翻訳である。サヴェート区域の事情を窺ふための資料一端ともなればと思つて紹介することにした次第である。

(1) サヴェート区域の面積

鄂・予・皖……(湖北、河南、安徽)境界には3ヶ所の赤色区域が存在し、其の間数ヶ所に白色区域が存在して未だ完全なる接続はなしてゐない。第一の赤色区域は北は河南省南部の応山県南部に起り、光山県の南部、湖北省境の応山県東部、孝感県(漢口を距る約120支里)の北部、黄坡県(漢口を距る百支里)の東北部・黄安県全部及び麻城県の西北部等を包括し、其の面積は最も大きい。第二の赤色区域は河南省境の商城県の東部に起り、安徽省境の太和县及び霍山県の西部に連がる一帯の地方であり、1931年の年末に太安及霍山赤色区域の大衆は国民党軍隊の極端なる残酷な屠殺に非常な損失を受けたが現在着々と恢復及び拡大に努力しつつある。第三の赤色区域は、湖北省境の黄梅、広濟両県を包括し、其の面積は東西3,40支里南北約40支里に達する。以上の赤色区域の間をなしてゐる河南省境の商城及び光山の一部、湖北省境の羅田の一県は、現在3個のサヴェート大衆が該地方を克服獲得すべく極力努力しつつあるが故に、遠からず3個の赤色区域は接続されるであらう。

(2) 地主は山上に立籠る

地主豪紳は農村に於ける支配勢力を喪失した後、彼等同類を糾合して赤白区域の境界に在る山地に土寨を築き、専門的に赤色区域を攻撃する彼等は赤色区域の大衆が防備手薄と見るや忽ちにして農民の家畜——牛、馬、豚、鶏等を襲ひ、耕地の五穀を盗み、男に遭へば之を屠殺せんとし農婦、農女に遭へば之を山寨に拉し去り而して白色区域に転売する。かゝる山寨に於ける地主の武装隊伍は其の全部が、五穀を盗み赤区の婦女を叩き売った金銭で維持されてゐる。彼等は時を選ばず遊撃戦争を展開するが云ふまでもなくこれは反革命の遊撃戦争である。

「従前赤軍の勢力が強大でない頃は——と彼等は言ふ——彼等は山上に立籠り遊撃戦争をなしてゐたのだ。現在彼等の勢力は強大となった。そこで吾々も山上に立籠って遊撃戦争を実行せねばならない。」かくの如くして、吾赤色区域の政權は従前の地主豪紳の手から別な一階級の手に転じたのである。

(3) 赤色区域大衆の勇敢なる闘争

国民党の赤色区域包圍攻撃が開始されて以来、赤色区域の大衆は男女老幼を問はず一日として戦争なき日とはなない。

国民党の軍隊は一方面飛行機を飛ばして赤色区域に爆弾を投じ、一方面亦大砲機関銃を以て赤軍を掃射する。彼等が赤色区域を占領した時は即時焼殺、姦淫、掠奪等が全幅的に行はれるにも拘らず、大衆は之を恐れないのみか、これにより激しい憤激を発生する。而してこれ等憤激した群衆は随処に国民党軍隊の行軍を破壊し、軍器を奪ひ、軍用電話を切断し、毎夜白軍の営地に侵入して白軍兵士の兵変を煽動し、かくて、白軍をしてサヴェート区域に接近せしめず、他方では深溝高壘を築いて白軍の襲撃を防備して赤軍を援助する。本年の初め、信陽、北渾河一帯の農民数万人は、自己の農具を携へて当該地域の赤軍の作戦に呼応して白軍の数千の武器を獲得した。

(4) 白軍は屢々次赤軍に撃退さる

白軍と赤軍とが会戦する時には、毎度必ず数千、数万の群衆が四方八方から赤軍を援助し、白軍の行動を妨害する。

赤白軍が会戦する時、白軍の多くは赤軍の主力が何処にあるかを知らず、自身が赤軍に包囲された場合すら、赤軍の軍事行動を熟知しない。かくて屢次の武装解除は白軍の頭上に延びてゐる。本年初め大安県境の陳調元の一団は、赤軍のかゝる包囲に陥り、武装を解除され、新洲に在った郭汝棟の一部約400余も亦同様に包囲され、武装を解除された。その他金寨に在った吉鴻昌の二営も赤軍のために、機関銃4挺、迫撃砲8門を奪はれた。且つそれと同時に全部の兵士は赤軍の捕虜となった。夏演部は数千の小銃、機関銃3挺を奪はれ、周知の如く岳維竣は3月中に赤軍のために大敗して捕れた。白軍の兵士は羣衆の絶へざる煽動により、屢々兵変を起し、吉鴻昌部の一部が、7,8名或は4,5名づつ軍器携帯のまゝ赤軍に加入して来たことは、4,5回以上に上つてゐる。

3月中に袁英部の軍隊は、京漢鉄道一帯で、多数兵変を惹起して赤軍に投じて来た。白軍兵士のかかる兵変は屢々白軍大敗の主要原因とさへなつてゐる。

(5) 土地の再分配

鄂皖予省境のサヴェート区域の土地は本来已に分配を終了してゐる。しかし、尚幾多の土地は未分配のものがある。かゝる未分配の土地の多くは荒廢せる土地で耕作に適せず、それがため、農民は多くの土地を欲求しないのである。もし多くの土地を享受したならば、富農の格となる恐れがあり、農民は現在富農が極度に一般農民の反対する所となつてゐるが故に、進んで荒廢せるこれ等の土地の分配を要求しない。

各地郷区サヴェート政府はかような情勢を見て、更に新に土地の分割分配を決定し、家族数及び労働力の兩者を中心として平均分配の原則に基いて分配を実行した。

赤軍士兵も亦同様に土地の分配に与つた。各地の山林で農民の希望するものは已に分配した。共同農場は極一小部分存在してゐる。

(6) サヴェート政府の経済政策

白軍の包圍攻撃と破壊のために、赤色区域大衆は長期の戦闘に動員され区域内の経済問題はそれがため、異常な困難に遭遇するに至つた。従前サヴェート政府は徴発制度を採用し、農民の多量の糧食を（自発的な！）政府は無償で借受け、サヴェートが新に発展拡大されたとき地主豪紳の糧食を一律に没収して之を農民に償還してゐた。もし農民が償還を希望する場合には償還するが、農民は何れも政府に貸給することを希望してゐる。同時に彼等農民は、深くサヴェート政府が彼等自身の利益のための政府であることを自覚してゐるが、これは一つに土地を自己の手に獲得出来たからであらう。

貧窮な農民に対しては、サヴェート政府は彼等に農具を援助するのみならず、尚其の他に救済委員会を設けて彼等を救済し、サヴェート政府の能力の許す限り、彼等に糧食を貸与してゐる。

サヴェート政府は、交易に対しては、禁止策を採らず低利の個人的貸借も許してゐる。がしかし、高利の貸借は勿論嚴重に取締つてゐる。且つ一般民衆に共同組合の自発的組織を奨励し、土地及び商店に対してはサヴェート政府は累進税の徴収を決定してゐる。

(7) サヴェート区域内の新聞学校等々

サヴェート区域内で発行される新聞は多い。これらの諸種の新聞は印刷は極めて鮮明でないが、それにも拘らず、一般民衆は非常に新聞を好み且つ積極的にそれを購買してゐる。その二三を茲に挙げれば、「レーニン週報」（多く理論的文章を掲載）「党生活」（共産党々員の読物）「紅色戦士」（これは赤軍兵士の読物）「サヴェート」（これは一般大衆の読物）があり、尚この外赤軍中には「赤軍生活」が刊行されてゐる。学校としては、軍事政治学校が一つあり、幾多の地方に小学校が開設されてゐるが、教師の不足により、現在まだ各地に亘つて普遍的に開校するまでには達してゐない。中学も亦対白軍戦争及び教師不足の関係で開設されたものは極めて少数である。

医院の設立せるもの1ヶ所、收容人員は1千数百名に上つており、その大半は戦争によって前線から移送されて来た負傷者である……（下略）

この通信によると、国民党の軍隊が、湖北、河南、安徽省境一帯の包圍攻撃に何等の勝利をも収めてゐないに反して、赤軍の闘争は、実に果敢であり、白軍を屢々撃破し、多数の軍器を奪つてゐる。

（『上海週報』817号——昭和6年9月15日、16～17頁）



ソヴェート支那の近況

〔『東亜』5巻5号所収〕

民国16年12月、蔣介石が聯俄容共政策をカナグリ捨て、中国共産党に対する弾圧の鉄槌を加へて以来、殆ど潜行運動にのみ終始して来た彼等も、今や国民政府が実力を失ひつゝあるの秋に乗じ、その再建、再組織運動に向つて着々成功を収めつゝあるものの如くである。即ち中国共産党は、最近に於て、突如統制的拡大運動を益々強化し、福建、江西にある紅軍を動員して、戦意地を払ひたる国民政府軍を随地随所に撃破し、所謂赤色区域拡大実現工作に拍車を加へ、急テンポに之を進行せしめつゝある。

左(下)は中国共産党の機関雑誌『光明之路』(週刊)第30期に掲載された『ソヴェート支那よりの通信』と題する一文を訳出したものである。即ちこれにより現在、この地域の中軸をなす湖南、湖北、江西省境一帯に於ける彼等の闘争並に建設に対する、予ねての態度及びその計画が、如何に執拗であり又如何に真剣であるかを窺知し、更に今回の彼等の躍動が、決して偶然にあらざるを証する一資料たるを失はないものと信ずる。

ソヴェート区域は湖南、湖北、江西三省の省境に位し、以下の各県を包轄する。即ち湖南省では鄱県、茶陵、攸県、醴陵、瀏陽、平江、長沙及び岳陽の一部、湖北省では通城、江西省では蓮花、宜春、万載、萍郷、銅鼓、修水等である。だが此等の地方でも未だ若干は、完全にソヴェートの権力下に置かれてゐない処もあるので、依然として白軍或は武装せる地主が散在してゐる。而してこの地域に於ける紅軍の主力は第十六軍である。

この地方の土地の大部分は既に分配されたので、貧農の生活水準は一般的に従前よりも改善された。しかし富農が裏面で之を妨害したり、或は所有耕地をゴマカして報告をしたり、若しくは所有土地の面積を少く申告したり、乃至はそのソヴェート政府内に於ける勢力を逆用して勝手に利益を壟断したりして、少からず土地分配の進行を困難ならしめてゐる。之れが為め蓮花県等の如き地方では、今日までに既に再三再四土地の分配が行はれた。

ソヴェート区域の農民は、土地を得たばかりでなく、一切の封建的な苛捐雑税からも解放された。即ち現在では一種の単一な累進税が課せられてゐるだけで、その税率は通常5担以上の粟の超過額に対してその2%を徴収されるのみである。従来修水、銅鼓の両県では、粟3担から徴税されてゐたが、現在では如斯苛酷な税金は全然消滅されて仕舞った。だから人民も凡てこの公平たる税金の納付を悦び、良好なる徴税成績を挙げる事が出来るやうになった。一例を示すならば万載県では、1930年には此の累進税によって徴収した粟の数量は実に2,400石に達した。

小商人はソヴェート政府に届出を行ひさへすれば自由に営業をする事が出来る。この地方の主なる物産は紙、

茶、石炭、陶磁器であり、現在瀏陽県のソヴェート政府では製紙工場を設けて居り、蓮花県のソヴェートでも石炭及び陶磁器工場の経営を行つてゐる。万載県の特産物である陶磁器、茶瓶、茶碗等には革命標語や口号を焼付けてあるが、一般に労働者や農民達の歓迎を受け好売行を呈してゐる。

各県の労農銀行が発行した紙幣及新たに鑄造した銀元も大衆から歓迎され、当初は岳州、泊羅県の白色区域にまでも流通し、白色区域の民衆すら之を悦んで通用してゐたものだが、其後国民党官憲の発見する処となり、而も労農銀行発行の紙幣を使用したのが為めに死刑に処せられた無辜の人民の數も決して少なくはなかつた。

ソヴェート区域が国民政府の官憲の為に完全に経済封鎖を食つた後は現金が欠乏したので、多くの奸商達は之を奇貨として金融を操縦し、兌換の強要を煽動して現在の労農銀行紙幣の信用を失墜せしめた為め、此種の紙幣が未だに十分に通用する迄になつてゐない。目下平江県の労農銀行が発行した紙幣の額は1万3千円で、銀元を鑄造した高は1千円である。又瀏陽県に於ける紙幣の発行高は一万元であり、万載県では6千円、修水県では約3千円である。

紅軍の兵士は一般に民衆から敬愛されてゐる。例へば民衆は悦んで彼等に湯茶を提供したり、粥を与へたり、道案内をしたり、輸送の手伝ひをしたりする。傷病兵が受くる待遇は実に到れり尽せりであり、平瀏後方病院では、最も多い時には5千人以上の患者を収容した事さへもあつた。各地のソヴェート政府は常に婦人慰勞隊を派遣して彼等の被服の洗濯をさせたり、繕ひをさせたり、或は唱歌や演劇を催して慰問を行ふ。有事の際には、一般民衆の大部分も亦自己の財産を顧る事なく、互に全力を挙

東京大学
文学研究
あるから
は印刷し
ばあいそ
が、冊子

たら、今
たちは大
ばあい
るから、
た方がよ
るうか。

東京大学
東京、

日本にお
、日本に
個々の蔵
を確かめ
しいが、
少しく列

録(宮内
1916~

1960、

598・125

東京、

東京、

。東京、

之部。東

1967、



げ先を争って傷病兵の看護避難に当たってくれる。次に廃兵に対しては、平江、瀏陽、修水等の各県に、ソヴェート政府が設けた紅軍廃兵休養教育院の設備があり、こゝでは手芸及政治知識を授ける。

今の処紅軍は未だ悉く労働者及小作農のみを基礎として組織されてゐる訳ではない。従って富農や流氓の類が紅軍陣営の一分子を成してゐる事は、既に周知の事実である。此種の不良分子は往々反動団体等から利用されて、人民の紅軍に対する信用を破壊するが如き役割さへも演ずる事がある。例へば萍郷、茶陵県に於ては暴力に訴へて大衆を強制的に紅軍に加入させて仕舞った事があつた。乍併此等反動者流の陰謀も、幸ひ其後遂に大衆の爲めに観破さるゝ処となり、1930年9月より31年3月までの間に、この地方に於ける労農大衆にして自発的に、紅軍の陣営に加入して来たものが実に3万余人の多きに達してゐる。

此外各地の農民達は地方防備の爲めに自ら赤衛隊を組織してゐる。彼等の任務の主なるものは、隣接白色区域に向つてパルチザン闘争を計画的に遂行したり、或は赤色区域内若しくは省境にある地主を擁護する武装団体を消滅させたり、乃至は紅軍を支援してソヴェート区域を攻撃せんとする白軍を防禦したり、農民の耕作を擁護するにあるのだ。現在、この赤衛隊が所有する兵器は3千余挺の小銃があるが、大部分のものは矢張り刀槍等を以

て武器としてゐる。

未成年の男女は、夫々少年先鋒隊や童子団を編成してゐる。彼等の勇氣は非常に強く、或る少年先鋒隊の如きはその戦闘力に於ても、普通の赤衛隊に比して何等の遜色がないどころか立派に戦闘に参加する能力を具有してゐる。

不断に白軍の攻撃を受け、極めて困難な環境の下にあるにも不拘、このソヴェート区域の文化的施設も亦その成績大に見るべきものがある。就中瀏陽県の如きはその成績特に優れ、瀏陽全县8区の内第三、第四の両区の如きは従来曾て白軍の蹂躪を受けた事がない完全なソヴェート区域である。即ち此の両区に就て之を観るに、第三区には赤色小学校が60校とレニン高等小学校1校が設立されてあり、第四区には初等小学校が50余校とレニン高等小学校が1校ある。各小学校では女子小学を附設して半日は少女教育に当り、夜間は成人教育を施す爲め補習学校を開いてゐる。そして筆墨類だけは学生の自弁だが、用紙や教科書の類は一切郷ソヴェートから之を支給してゐる。因みに此等の学生中には学業成績の思はしくないものもみない訳でないが、それ等のものでも、よく革命イデオロギーを体得して常に只管打倒帝國主義と、国民党統治下にあるソヴェート区域を顛覆せざるべからずとなす意気にもえつゝある事だけは確かだ。

(『東亞』5巻5号——昭和7年6月、90~92頁)

新 刊 紹 介

東アジア近代史の研究 大塚歴史学会編

東京 お茶の水書房 1967.2 335 p.

大塚歴史学会というのは、東京教育大学史学科を中心とする歴史学会である。この学会の1964年、1965年大会では、「アジアと近代」を共通論題としてシンポジウムを行った。本書はこれら2回のシンポジウムの成果であつて、次の8篇の論文を収める。

幕末・維新时期における経済構造と階級闘争——

明治維新の革命的昂揚期を中心として

(高木俊輔)

21

征韓論の成立とその意義 (大江志乃夫)

59

幕末明治初期における独立と自由について——

特に西欧観と対アジア意識を中心として

(芳賀登)

92

明治14~15年の自由党 (山田昭次)

122

閔妃虐殺事件の処理策をめぐる諸問題 (朴宗根)

156

アヘン戦争時期における抵抗派の成立過程——

アヘン対策をめぐって (田中正美)

221

19世紀における中国農民闘争の諸段階 (小林一美)

260

中国における革命的民主主義者の途——禹之謨

とその周辺 (中村義)

303

近代中国農村社会史研究

東京教育大学東洋史研究室アジア史研究会

中国近代史研究会編

東京 大安 1967.7 363 p.

東京教育大学出身の若い近代中国研究者の論文集で、次の6篇の論文を収め、末尾に『租税』を影印附録する。

太平天国前夜の農民闘争——揚子江下流デルタ地

帯における (小林一美)

1

中国近代漁業史の一駒——咸豊8年鄞県の漁民闘

争をめぐる (姫田光義)

63

清末哥老会の成立——1891年長江流域起事計画の



背景 (渡辺惇)	109	中国文学の中の学生像 (植田渥雄)	414
清末減租論の展開——『租穀』の研究 (鈴木智夫)	199	おばさん達とハイティーンたち——茹志鵬の描く 新中国の女性像 (柘本洋子)	425
清末四川の大佃戸——中国寄生地主制展開の一面 (久保田文次)	247	中国の小市民——曹禺の「日の出」を通して (芦田肇)	439
辛亥革命前後における蘇州府の農村社会と農民闘 争 (小島淑男)	297	労働者 (立間祥介)	453
近代中国の思想と文学		VI 革命と文学 (文学理論)	
東京大学文学部中国文学研究室編 東京 大安 1967.7 628, 8p. 東京大学で中国文学を講じておられた小野忍教授 の還暦退官を記念して門弟が作った論文集。次に 記す34篇の論文が7部に分類編集されている。		瞿秋白の文学論の特長——「魯迅雑感選集序言」 を中心に (新島淳良)	467
I 近代思想の受容		何其芳の大衆化理論 (樋口進)	485
嚴復の西欧思想——天演論の場合 (高田惇)	3	「周揚批判」問題覚え書き (丸山昇)	503
魯迅の「進化論」 (北岡正子)	21	王国維と俞平伯の一面 (覚書) ——「皇帝」との 距離, その他 (伊藤漱平)	519
II 革命思想の形成		VII 文学者と学問・および其他	
章炳麟と孫文——徳と知 (近藤邦康)	41	考古の魯迅——紹興周樹人「呂超墓誌跋」読後 ——隋国号攷 (戸川芳郎)	547
陳独秀と李大釗 (丸山松幸)	59	感動のない文学史——『挿図本中国文学史』 (伝田章)	567
毛沢東——その「自覚的能動性」について (竹内実)	76	聞一多と唐詩 (佐藤保)	585
III 啓蒙と改良		儒・道・墨と作家——魯迅と郭沫若の発想 (尾上兼英)	603
王国維における近代的芸術思想について (田仲一成)	107	魯迅の旧詩 (石川忠久)	611
梁啓超——清末一知識人の意識 (有田和夫)	127	あとがき (前野直彬)	626
胡適における啓蒙思想の形成——伝記資料にもと づいて (竹田晃)	144	年表	
IV 近代文学の諸相		朝鮮・中国の民族運動と国際環境	
近代文学の出発——「原魯迅」というべきものと 文学について (片山智行)	165	英修道・入江啓四郎監修 東京 巖南堂書店 1967.9 325.p アジア・アフリカ国際関係史叢書1 『アジア・アフリカ国際関係史叢書』というの は、英修道・入江啓四郎を代表者とするアジア・ アフリカ国際関係研究会が、これまで雑誌等に発 表された論文で今日でも価値の高いに拘らず入手 し難いものを復刻して、研究者に便しようとした もの。その(1)である本書には、次の8篇が含まれ ていて、これら論文に対する解説が附録されてい る。	
周作人——思想と文章 (木山英雄)	183	朝鮮開国の前後 (四方博)	3
茅盾と長篇小説 (高田昭二)	200	韓国併合をめぐる国際関係——韓国独立運動史序 説 (植田捷雄)	55
郭沫若のロマンチズムの性格 (秋吉久紀夫)	219	三・一運動について (山辺健太郎)	99
老舎——「幽默から正経へ」の道 (中野美代子)	239	清末擾外運動 (鈴木中正)	155
巴金——愛と革命 (松田和夫)	258	辛亥革命——日本の対応 (白井勝美)	185
小説より見たる林語堂 (蘆田孝昭)	277	南京事件と日・米 (衛藤藩吉)	203
郁達夫における女性——ジョージ・ムア作 'A Waitress' の翻訳をめぐる (伊藤虎丸)	296	国共合作問題と中国ナショナリズム (宇野重昭)	225
延安時代の丁玲とその文学 (檜山久雄)	324	大戦中の米華関係——戦後の日米関係の前提	
V 描かれた人間像			
知識人のえがく農民像 (溝口雄三)	347		
都市下層民——車夫と下女の世界 (林直史)	373		
放浪者 (城谷武男)	387		
近代中国文学における知識人——魯迅「孤独者」 を中心に (津田孝)	402		



- (山極晃) 263
 解説 (池井優) 311
- 中国をめぐる国境紛争**
 英修道・入江啓四郎監修
 東京 巖南堂書店 1967.9 199 p.
 アジア・アフリカ国際関係史叢書 2
 次の6篇の古い論文を復刻する。
- ネルチンスク条約の研究 (入江啓四郎) 3
 清代満州を繞るロシアとの国境問題交渉 (矢野仁一) 47
 中ソ間におけるモンゴルの地位 (坂本是忠) 107
 中ソ対立における中印国境問題と中蒙国境画定の意義 (坂本是忠) 125
 トヴァ自治共和国——中ソ間におけるその位置づけ (坂本是忠) 140
 新疆をめぐる中ソ関係 (坂本是忠) 154
 解説 (大畑篤四郎) 175
- 中国のめざすもの——文化大革命の全体像**
 中国研究所編
 東京 徳間書店 1967.9 238, 8 p.
 中国研究所では、1967年5月末から6月末にかけて、「プロレタリア大革命の諸問題」という題名で、9人の講師による10回にわたる講座を行った。その講座の速記を整理したのが本書である。その内容は次の通り。
- 文化大革命の経過とその意義 (安藤彦太郎) 7
 北京の奪権闘争 (新島淳良) 35
 二つの路線のたたかい (岩村三千夫) 69
 ソ連の文化大革命との比較 (菊地昌典) 100
 社会主義社会における階級闘争の理論 (福島正夫) 127
 人民解放軍と文化大革命 (山下竜三) 158
 社会主義経済建設と文化大革命 (菅沼正久) 183
 マルクス・レーニン主義と毛沢東思想 (新島淳良) 211
- 中国の社会思想** 小島祐馬著
 東京 筑摩書房 1967.11 454 p.
 著者はその晩年、門弟に請われるままに、論文集を刊行することとし、旧作に改めるべき箇所あればそれを改め、また新たに四篇の論文を書いて、刊行の準備を進めておられたが、その終らぬうち、1966年他界されてしまった。この遺稿を門弟が整理し出版したのが本書であって、旧作の25篇が含まれている。中に改訂のほどこされたものもあることは勿論である。これら論文のうち、近代中国に特に関係深いものは、次の7篇である。
- 龔自珍の農宗説 262~278
 廖平の学 279~296
 六変せる廖平の学説 297~302
 譚嗣同の『仁学』 303~329
 章炳麟の『非黄』を読む 330~337
 劉師培の学 348~371
 四存学会の顔李学提倡 372~375
 このほか「康有為の『大同書』」、「章炳麟の無政府思想」が新たに執筆される筈であったが、残念ながら、本書に欠けている。但しその大意は「かくあらん」と解説に記されている。
- 山崎先生退官記念東洋史学論集**
 山崎先生退官記念会編
 東京 大安 1967.12 541 p.
 東京教育大学で東洋史学を講じられていた山崎宏教授の定年退官を記念して門弟知友が書いた論文集。すべて45篇。そのうち近代中国に関するものは、次の6篇。
- 清代山西地方の書院と社会 (大久保英子) 87~102
 清末民国初期における浙江省嘉興府周辺の農村社会 (小島淑男) 185~196
 材則徐の進歩性に関する一考察 (田中正美) 269~278
 洋務派の朝鮮政策について (中村義) 319~328
 清代の漢軍督撫について (楢木野宣) 329~340
 清末沿海諸塩場における製塩技術の転換とその意義——煎法から晒法への移行を中心として (渡辺惇) 515~528
- 中共路線とアジアの共産主義**
 東京 アジア政経学会 1968.3 202 p.
 現代中国研究叢書
 次の6篇の論文から成る。
- マルクス主義と民族革命 (青野博昭) 1
 民族解放運動をめぐる二つの路線——民族民主主義と人民民主主義 31
 中共路線とインドネシア共産党 (谷川栄彦) 60
 中共路線とビルマ (伏見楚代子) 85
 インド共産党と中国 (川上やまと) 121
 中国路線とベトナム労働党 (真保潤一郎) 160
- 中国をめぐる国際政治——影像と現実**
 坂野正高・衛藤濤吉編

東京 東京大学出版会 1968.3 347 p.
 先年、東京大学東洋文化研究所を退官された植田捷雄教授の学恩を受けた坂野正高以下7人の論文を集めたもの。

中国を英国の外交官はどのように見ていたか
 ——マカートニー使節団の派遣から辛亥革命まで (坂野正高) 1

孫文と中国革命の思想——「心理建設」を中心として (藤井昇三) 81

中国ナショナリズムの発展とロシア革命の影響——陳独秀と李大釗を例として (宇野重昭) 129

日華緊張と日本人——1925年から28年までの朝日と日日の内容分析 (衛藤藩吉) 183

インド民族運動の展開と東アジア (中村平治) 237

中国共産党の反米路線の確立過程 (山極晃) 275

中国問題のシミュレーション的研究 (関寛治) 313

近代中国政治史研究 衛藤藩吉著

東京 東京大学出版会 1968.3 302 p.
 (東大社会科学叢書26)

著者がこれまでに雑誌その他に発表した論文の中から、清朝に関係あるもの6篇を選び、これに多少の加筆補正を加えて収録したもの。巻末に、海外における中国研究の実情を紹介した2篇の報告を附録する。

清朝体制の弛緩とアヘン戦争 (『世界史大系』14, 1958年) 3

アロウ戦争と太平天国 (同上) 41

アヘン戦争以前におけるイギリス商人の性格 (『東洋文化研究所紀要』3, 1952年) 73
 [付録] ジャーディン・マゼスン商会 (『世界史講座』4, 1954年) 152

砲艦政策の形成——1834年清国に対する (『国際法外交雑誌』53-3, 1954年) 167

ミッチェル報告書について (『東洋文化』20, 1956年) 215

ヨーロッパ近代との政治的対決 (『東洋思想講座』1, 1958年) 235

[附録] コロンビア大学の中国研究者養成 (『近代中国研究センター彙報』1, 1963年) 263
 中国史学会に出席して (『近代中国研究センター彙報』6, 1965年) 289

現代中国と孫文思想

安藤彦太郎・岩村三千夫・野沢豊編
 東京 講談社 1967.2 286 p.

1966年は孫文生誕100年にあたる。そこで、同年、日本各界の有志により「孫文先生生誕百周年記念事業委員会」が結成され、式典、記念講演、展示会、史跡の調査、記念出版が行われた。本書はその記念出版の一で、次の論説を含む。

孫文の日本観 (岩村三千夫) 9

孫文と現代中国 (安藤彦太郎) 35

孫文と国共合作 (池田 誠) 58

孫文先生と日本 (末川 博) 91

孫文回想 (宮崎竜介) 103

孫文略伝 (北山康夫) 126

孫中山——堅忍不拔、百折不撓の革命家 (宋慶齡) 153

孫中山先生の思い出 (何香凝) 177

孫文さんとの対話 (松永安左エ門) 207

『孫文学説』を読むことを勧める (片山 哲) 212

日中友好の実践者 (宮崎世民) 215

孫文とベトナム (坂本徳松) 218

革命なお未だ成功せず (高木健夫) 224

孫文と日本、その関係のへだたり (遠山茂樹) 241

孫文と朝日新聞 (波多野宏一) 245

中国革命と日本人 (井上 清) 251

孫文在日年表 257

毛沢東思想と中国の社会主義——中共革命の再検討

現代アジア社会思想研究会編

東京 現代アジア出版会 1967.4 297 p.

数度のシンポジウムを経て取りまとめた次の7篇の論文を収める。

毛沢東思想と文化革命——最近中国に関する二三の憶説 (村松祐次) 13

中国革命の特質と文化大革命——後進国革命と党独裁体制における思想革命の役割 (上別府親志) 37

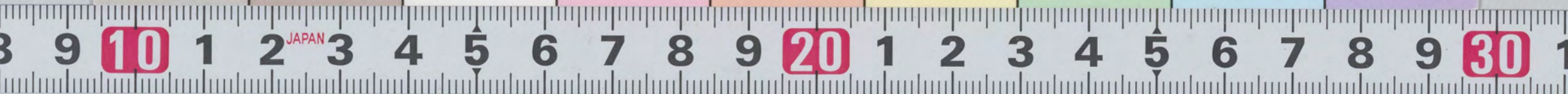
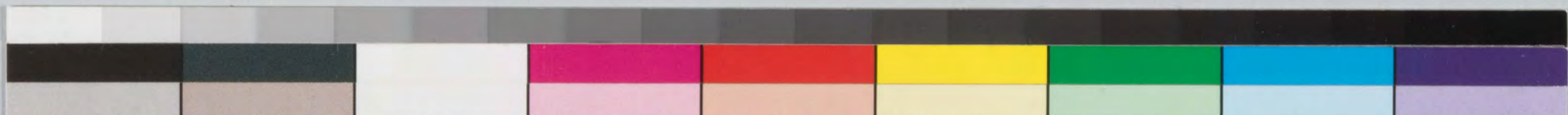
農村における社会主義教育運動 (山本秀夫) 81

毛沢東学習運動と中共の労農教育 (根本誠) 117

中共思想闘争のパターン——吳晗批判を中心として (熊野正平) 175

人民戦争体制と文化革命 (蔵居良造) 205

ソ連共産主義と中国の社会主義革命レーニン主義の形態発展と毛沢東革命の特質 (小林多加士) 247



センター出版物目録

東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録 1, 2

1965年3月末日までに受け入れた図書を収録。

204頁, 165頁 B 5 頒価各700円

東洋文庫近代中国研究室中文図書目録 2

1964年1月より1965年3月末日までに受け入れた図書を収録。

78頁 B 5 頒価600円

東洋文庫近代中国研究室欧文図書目録 2

1962年4月より1965年3月末日までに受け入れた図書を収録。

44頁 B 5 頒価280円

近代中国研究

第5輯

341頁 A 5 頒価1,500円

20世紀初頭における蘇州近傍の一租界とその小作制度 村松 祐次

咸豊二年鄞県の抗糧暴動 佐々木正哉

中国文雑誌論説記事目録(時務報)

第6輯

359頁 A 5 頒価1,800円

清末民初の江南における包攬関係の実態とその決算報告 村松 祐次

第一次国共合作期における内蒙古民族運動 坂本 是忠

5・30事件と在華紡 中村 隆英

武漢政府の崩壊過程 栗山 喜博

中国文雑誌論説記事目録(商務官報)

第7輯

483頁 A 5 頒価2,200円

中国商号考 天海謙三郎

戊戌より庚子に至る革命派と変法派の交渉 手代木公助

井上条約改正交渉に関する一考察 広瀬 靖子

中国関係日本文雑誌論説記事目録

1. 「外事警察法」「北京週報」「燕塵」の3誌の論説記事目録。 頒価800円

2. 「支那時報」「東亞」「情報」「調査月報」「特調班月報」の5誌の論説記事目録。 頒価900円

『解放日報』記事目録

1. 民国30, 31年分。 243頁 B 5 頒価1,400円

2. 民国32, 33年分。 296頁 B 5 頒価1,800円

鴉片戦争の研究(資料篇) 佐々木正哉編

319頁 A 5 頒価2,000円

鴉片戦争後の中英抗争(資料篇稿) 佐々木正哉編

436頁 B 5 頒価1,800円

清末の秘密結社(資料篇) 佐々木正哉編

300頁 B 5 頒価2,000円

近代中国研究センター彙報 32頁 B 5

6 中国農村人民公社管見 宮下 忠雄
モスクワとレニングラードの図書館管見 吉田 金一中国史学史学会に出席して 衛藤 藩吉
近刊辛亥革命史料紹介 市古 宙三7 解放日報社論目録
ヤン・ミュルダール「中国のある村からの報告」 村松 祐次支那に於ける共産主義運動団体と主要人物(資料)
中国済難会の正体と其の活動(資料)8 イエズス会士中国書簡編目 矢沢 利彦
思想問題に関係ある中国の定期刊行物(資料)
朱徳將軍年譜(資料)

中国の文化大革命に関する日本雑誌論説目録(1)

9 最初の漢訳聖書について 矢沢 利彦
中共党史関係資料目録(1) 徳田 教之
中国の文化大革命に関する日本雑誌論説目録(2)

(頒価250円)

10 近代中国研究の手びき(1) 市古 宙三

中共党史関係資料目録(2) 徳田 教之

日本人の新中国旅行記

(頒価250円)

記

本彙報購読御希望のむきは、当センターに1,000円(4号分、送料共)お送り下さるか、書店にて御購入下されば幸いです。 振替口座 東京14556





近代中国研究センター彙報 No. 11

1968年5月20日発行 頒価 250円

編集発行 近代中国研究センター

東京都文京区本駒込2丁目28番21号東洋文庫

